

## 第1章 1999年度岡山大学構内遺跡調査報告

### 第1節 調査の概要

当センターでは、大学構内における掘削を伴う工事に際し、事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで、発掘調査・試掘調査・立会調査に分けて調査を実施している。

これまでのところ、その調査の対象は津島地区と鹿田地区が中心となっており、津島地区の津島岡大遺跡、鹿田地区の鹿田遺跡いずれも周知の遺跡として、掘削を伴う工事に際し、届出を提出したうえで対応を行っている。

1999年度は、発掘調査5件（津島地区2件・鹿田地区3件）、試掘調査2件（津島地区）、立会調査41件（津島地区18件・鹿田地区23件）を実施した。以下に各調査の概要を述べ、立会調査の詳細については表1にも記す。

### 第2節 発掘調査

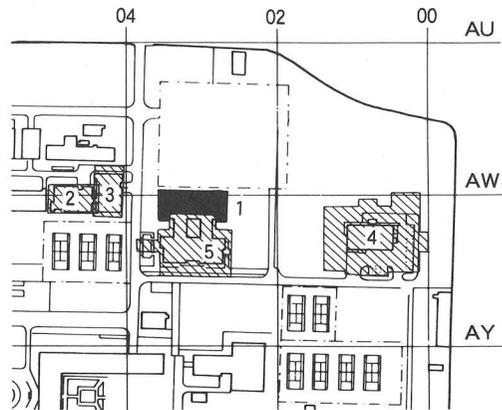
#### 1 津島地区

##### (1) 津島岡大遺跡第22次調査〈環境理工学部校舎Ⅱ期 津島北 AV・AW 02—03〉

##### a. 調査の概要

4月2日より1999年度の調査に入った。4月から5月初めにかけて、中世面の遺構検出を行った。溝・水口・畦畔である。5月13日からは調査員・作業員を増員して、5月半ばより古代面の調査へと進んだ。古代面では東西方向の大溝と水田畦畔を確認した。古代面の調査は6月2日に終了し、次いで古墳時代の調査に入った。古代層を除去し、10層では溝3条と水口・畦畔を確認した。その後11・12層でも遺構検出を行った。調査区北側部分には、およそ弥生時代～縄文時代前期の河道の埋土が次々に堆積しており、6月中旬からこれを随時除去していくという調査を行った。

6月下旬からは調査区南半で、13層上面の調査に入り、溝1条とピットを確認した。6月23日からは13層と河道4埋土の除去に入り、14層上面、15層（基盤層）上面で最終的な遺構検出を行った。土坑・ピット群の調査を終え、7月



1. 本調査地点
2. 第6次調査地点(工学部生物応用工学科棟)
3. 第9次調査地点(生体機能応用工学科棟)
4. 第15次調査地点(サテライトベンチャービジネスラボラトリー)
5. 第17次調査地点(環境理工学部校舎Ⅰ期)

図1 津島岡大遺跡第22次調査地点位置図

(縮尺1/5,000)

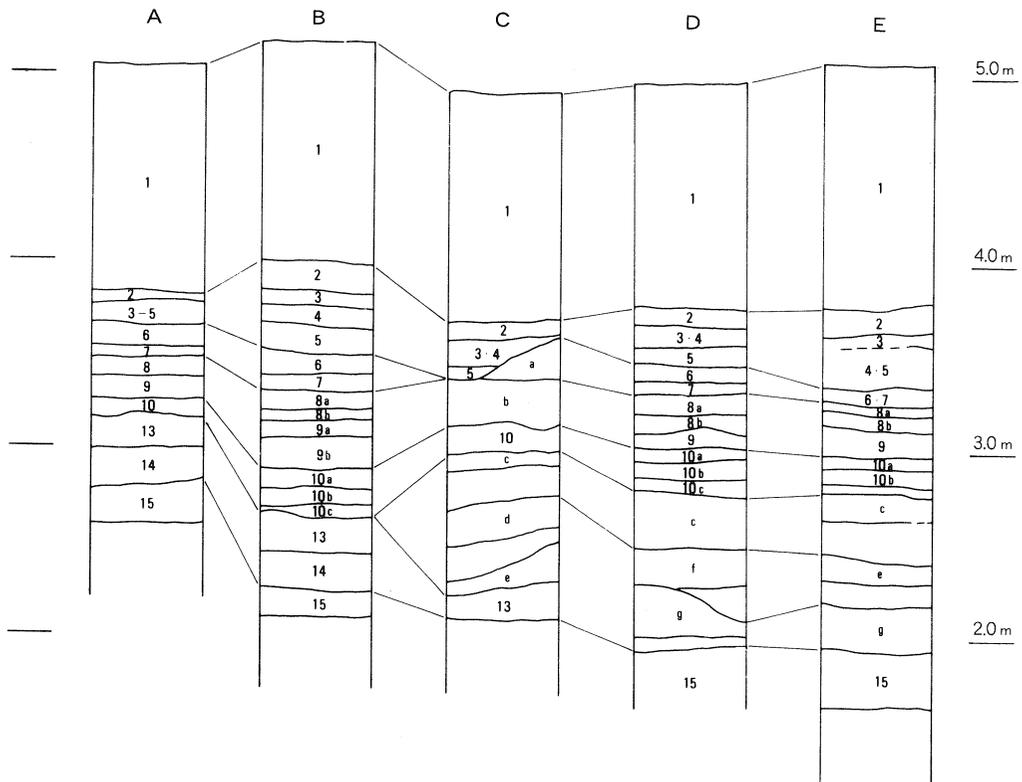
6日に最終写真を撮影し、7月12日に調査を終了した。調査終了後、7月16日に調査区内の各時期土層のサンプリング採取を行った。

## b. 調査の概要

### (1) 層序 (図2)

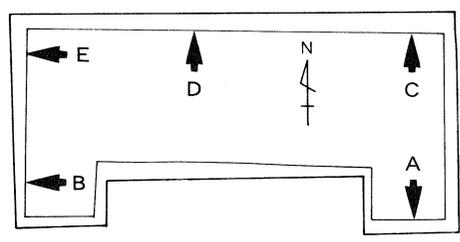
現地表は、標高5.1m前後である。1層は1907～1908年にかけて旧陸軍により行われた屯営地建設の際の造成土である。2層は近代の耕作土と考えられる土層で、淡青灰色砂質土である。2層下面までを重機により除去したため、2層上面の遺構は断面でのみ確認したもので、東西方向の畝痕及びこれに沿う東西方向の溝が認められた。3～5層は出土遺物から近世の耕作土と考えられる。3層上面の標高は3.6～3.85mである。3層は淡黄灰色砂質土、4層は暗灰褐色砂質土、5層は淡黄褐色砂質土層である。いずれもほぼ水平に堆積しており、鉄分・マンガンの沈着が帯状に認められる。6・7層は出土遺物から中世に帰属すると考えられる。6層は淡緑灰色砂質土で、上面の標高3.35～3.65m、7層は淡青灰色粘質土で上面の標高3.4～3.55mである。7層は、古代溝の上にあたる部分ではたわんで厚く堆積している。8・9層は出土遺物から古代の時期が考えられ、それぞれa・bの2層に細分できる。8a層は淡橙褐色砂質土で洪水砂と考えられる。8b層は淡青灰色粘質土で、耕作土であろう。9a層は淡黄褐色砂の、洪水砂であり、9b層は暗緑灰色粘質土で耕作土であろう。8・9層は類似しており、近接した時期に繰り返し耕作を行ったことが考えられる。8層上面は標高3.25～3.5m、9層上面は標高3.15～3.4mで、全体として北に向かって傾斜している。10層は灰色系の土層で出土遺物から古墳時代の時期が考えられる。上面の標高2.9～3.25mである。10層の堆積厚は南東部では10cmと薄く、北側では20～25cmと厚くなり、厚く堆積した部分ではその特徴からa・b・cの3つに細分できる。10a・10c層は砂質で洪水砂と考えられる。10b層は粘質が強く、耕作土であろう。11層は調査区の南側のみに確認された土層である。灰褐色粘質土である。12層も調査区の南側に部分的に確認された土層である。灰黄褐色砂質土で、洪水砂と考えられる。11・12層は出土遺物が少ないものの、従来の土層関係から弥生時代の範疇に帰属すると考えられる。13層は暗褐色粘質土層で、いわゆる「黒色土」に相当する。出土遺物から突帯文～弥生時代前期と考えられる。調査区の南端では標高3.2m、北端では2.3mと北に次第に傾斜していき、粘性が強まる。

14層は暗黄褐色砂質土層で、出土遺物から縄文後期の時期が考えられる。調査区の南側でのみ確認された土層で、南東部では標高3.0m、南西部では標高2.4mで、確認された部分では東から西に傾斜している。15層は黄褐色粘質土で、南側では砂質が強く、北に向かうにつれ粘性が強まり、次第に青灰色を帯びてくる。上面の標高は南東部が最も高く2.7m、北西部で1.95mである。縄文時代後期と考えられ、基盤層である。



- 1. 造成土
- 2. 淡緑灰色砂質土 (近代耕作土)
- 3. 淡黄灰色砂質土 (近代耕作土)
- 4. 暗灰褐色砂質土 (〃)
- 5. 淡黄褐色砂質土 (〃)
- 6. 淡黄褐色砂質土 (中世)
- 7. 淡青灰色粘質土 (〃)
- 8a. 淡橙褐色砂 (古代洪水砂)
- 8b. 淡青灰色粘質土 (古代耕作土)
- 9a. 淡黄褐色砂 (古代洪水砂)
- 9b. 暗緑灰色粘質土 (古代耕作土)
- 10a. 灰色砂 (古墳時代洪水砂)
- 10b. 暗灰色粘質土 (古墳時代耕作土)
- 10c. 暗灰砂質土
- 11. 灰褐色粘質土 (弥生時代)
- 12. 灰黄褐色砂質土 (弥生時代洪水砂)
- 13. 黑褐色粘質土 (弥生時代前期)
- 14. 暗黄褐色粘質土 (縄文時代後期)
- 15. 明黄褐色粘質土 (縄文時代後期・基盤層)

- a. - f. 遺構埋土
- a. 中世畦畔
- b. 8層上面溝
- c. 河道1
- d. 河道2
- e. 河道3
- f. 溝12
- g. 河道4



土層断面位置図 (縮尺1/800)

図2 土層断面図 (縮尺1/40)

## (2) 地形

本地点は微高地部分から低湿地部分に向かう傾斜地点にあたる。西側隣接地（第9次調査地点）で確認された縄文時代の河道は本地点の中には入ってこず、本地点よりも北側に流入しているものと考えられる。この河道へ向けて全体として北に傾斜した地形で、「黒色土」が発達する比較的安定した地点と言える。また南側隣接地（第17次調査地点）で縄文時代後期の遺構を多数確認した微高地部分は本調査区では南東を中心とした一角にかかるのみであった。

縄文時代～弥生時代前期にかけては、調査区の北側に複数の河道が流れていたことが確認された。これらの河道の堆積作用により、低地部分は次第に埋められていく。15層上面での南北の高低差は70～80cmであったが、弥生時代前期段階の河道2が埋まった時点での高低差は50～60cmとなる。その後もさらに低地部分への洪水砂の堆積が進み、古墳時代後期段階（10層）の整地では、高低差は30cm程度になっている。古代段階には調査区中央を東西に流れる大溝が作られ、これをはさんで南北で高低差はあるものの、南、北それぞれではほとんど平坦化した地形となり、以後、各時期に造成を繰り返しながら近代まで至るのである。

## (3) 検出した遺構（図3，4）

### 縄文時代の遺構（15層）

いずれも調査区の南東部で溝1条，土坑2基，ピット50数基，河道2条を検出した。溝の南端は第17次調査地点で検出された溝へ続くものと考えられる。土坑のうち調査区北側で検出された土坑11は，出土遺物から突帯文時期に帰属するものと考えられる。また河道3・4はいずれも上面がその後の河道によって削られているため，底部分を検出するにとどまっている。出土遺物には多量の縄文時代後期・突帯文時期・弥生時代前期の土器・石器を含んでおり，弥生時代前期の可能性が考えられる。

### 弥生時代の遺構（11～13層）

検出した遺構は水田畦畔1面（12層），溝2条（11・12層），河道2条（13層）である。

調査区北側で河道2を検出した。河道3の埋没後，やや南にふる形で河道2が形成されている。新旧2回の流路が認められる。河道2の上面は古代溝によって削平されているため，掘り込み面は確定できないが，出土遺物から弥生時代前期の時期と考えられる。その後，河道2が埋まった後に，溝12が掘削される。溝12の時期は出土遺物から弥生時代中期と考えられる。さらにその後河道1が厚く堆積している。河道1の時期としては出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

12層上面では，調査区南西部の一部で水田畦畔を検出した。ここでは他の地点に比べて12層の層厚がやや厚く残っており，灰黄褐色を呈する洪水砂に覆われた部分で，畦畔を検出した。

11層上面では調査区南西部で溝1条を検出した。出土遺物は少なく，土層関係などから弥生

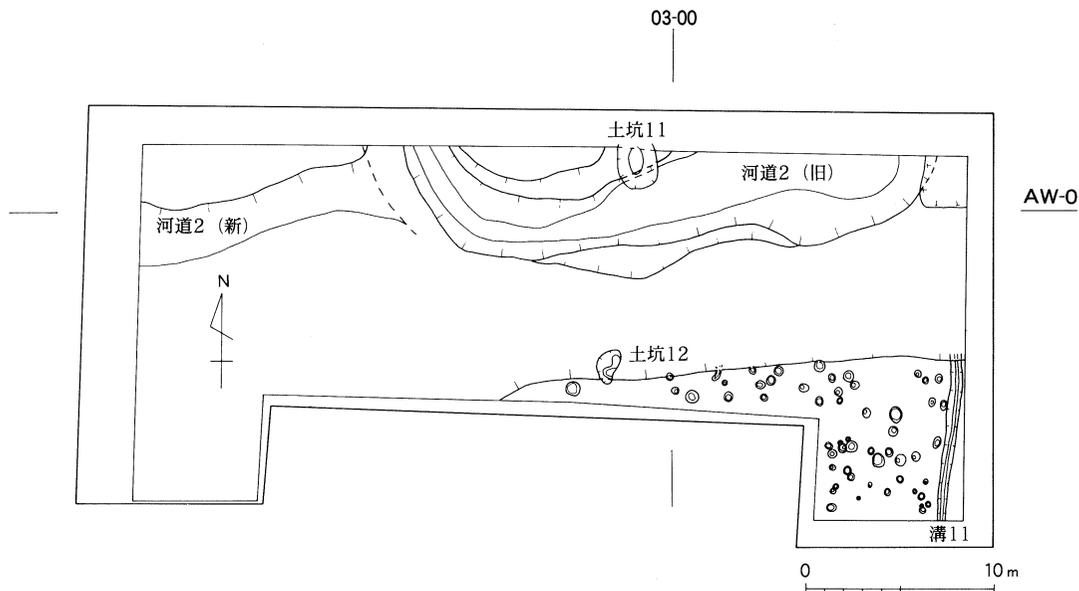


図3 縄文～弥生時代遺構平面図 (縮尺1/400)

時代後期頃と考えられる。

#### 古墳時代の遺構 (10層)

10b層上面で水田畦畔, 溝2条を検出した。畦畔は調査区北西部で南北方向, 北側中央部及び南東部で東西方向のものを確認した。北西部では取水口と考えられる遺構とそれに関連する溝を検出している。

また調査区の南側では溝9を検出した。幅約1.0m, 深さ0.2~0.3mで, ほぼ東西方向に走っている。この溝を挟んで南側では標高3.2m程, 北側では3.0m程度で平坦かした地形となっており若干の段差が認められる。畦畔・溝とも古墳時代後期に帰属するものと考えられる。

#### 古代の遺構 (8・9層)

溝・水田畦畔を検出した。溝は9層上面で確認したもので, 溝6・7が重複している。幅9~11m, 深さ1.0mを測る。古段階の溝7には北側に小さい溝が付随している。新段階の溝6では木杭を組み合わせた堰状遺構が検出された。木堰は水流に直交するように, 5, 6本の杭を打ち込み, 横木を掛けたもので, 西に向かって倒れている。ちょうど堰のある部分で東から来た流れが北側に湾曲していることがわかり, 取水などの何らかの理由で堰を設けたものと考えられる。遺物は土器・木製品等が多量に検出された。

水田畦畔は9b層上面, 8b層上面で, 溝に沿うように東西方向のものを検出した。

#### 中世の遺構 (6・7層)

検出した遺構は溝1条, 溝に伴う水口状遺構2, 畦畔である。溝は東西方向で, 10層で検出

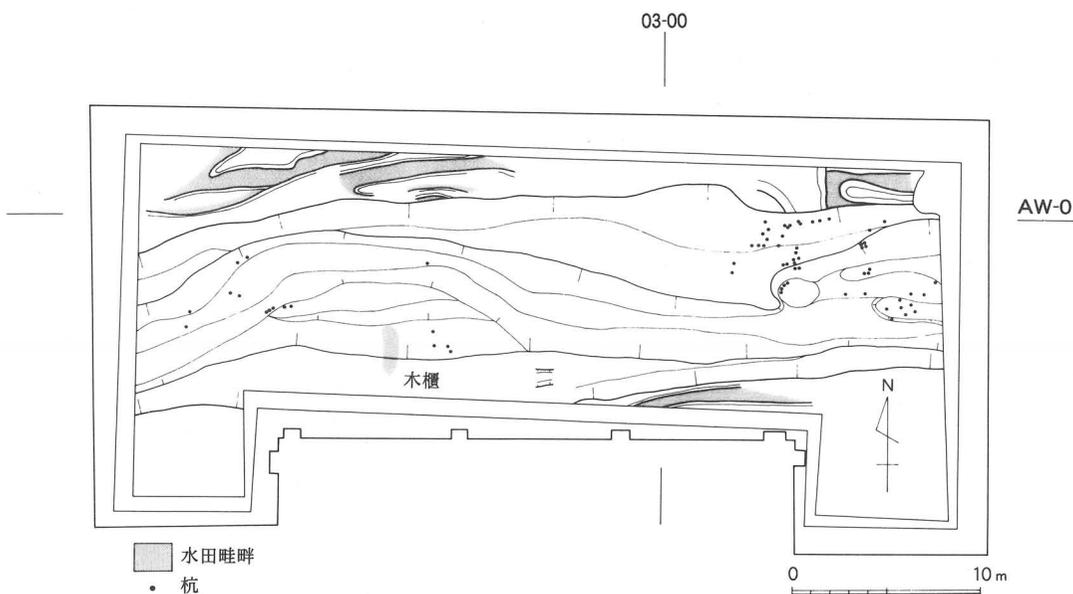


図4 古代検出遺構平面図 (縮尺1/400)

した溝9のやや北側にあたる。幅0.7~1.0m、深さ0.4m前後で、東側で水口状遺構2基が付随している。7層上面では溝の北部で広範囲に南北方向の鋤痕を検出した。また溝の南部では溝に沿うように東西方向の畦畔を確認した。

c. まとめ

本調査地点は微高地部分から谷部への傾斜地点にあたる。今回の調査ではこのような微高地と低地との間の遺跡の様子を、縄文後期以降、近代・現代に至るまでの地形の変遷、土地利用の変遷を中心につかむことができた。当初、周辺のこれまでの調査成果から縄文時代後期の河道の存在が想定されており、それに伴った貯蔵穴等の遺構の存在が期待された。しかし、この河道は実際には調査区内には流入しておらず、期待された遺構も存在しなかった。「存在しない」事実の確認も空白地帯があることを確認したという点で重要と言えよう。

縄文時代では第17次調査地点との関係が注目される。第17次調査地点では縄文時代後期の住居址を含む多数の遺構・遺物を検出している。また黒色土中からも多量の縄文時代後期の土器が出土している。本調査では、この縄文時代後期の黒色土と、従来のいわゆる「黒色土」との関係を確認することも一つの主眼であった。今回の調査区内では、「黒色土」にあたる13層からは従来通り突帯文期~弥生時代前期の遺物が出土している。ただし黒色土下面および14・15層からは縄文時代後期の土器が出土しており、今後、出土遺物の詳細な分析を進めて、黒色土の形成についても検討する必要がある。今回の調査終了後には土壌のサンプリングを行い、様々な科学分析を実施している。その結果も加えて今後分析を進めていきたい。

一方、微高地周辺の土地利用をつかむ情報はさらに蓄積が進んだと言えよう。縄文時期の自然河道へ向かう低地が河川の堆積作用が次第に進むことによって、次第に平地へと変遷する状況が時代毎に把握できた。今回の調査区では中央部を古代溝によって大きく削平されていることから、古代以前の水田関連遺構は部分的にしか確認できなかったが、弥生時代以降繰り返し水田を経営してきたことは窺える。また古代溝は第3, 6・7, 9, 12次調査の各地点でも確認されている、条里の坪境溝にあたる大規模な溝である。

津島岡大遺跡の調査は今回で22次にわたり、試掘調査等も含めるとかなり広範囲にわたって遺跡の内容が判明してきている。特に東北隅地域においては、調査頻度が高く、北側に立地する朝寝鼻遺跡の存在も含めて縄文時代後期～弥生時代にかけての集落構造を考える上で貴重な情報が蓄積されつつある。なお現在資料整理途中であるため、本報告は暫定的なものである。

(岩崎)

## (2) 津島岡大遺跡第23次調査 (総合研究棟新営工事に伴う発掘調査 津島北 AZ 15・BA 15区)

### a. 調査に至る経緯

当調査地点は岡山大学津島北地区に所在する文・法・経済学部棟の南に位置する(図5)。この地点には旧日本陸軍の兵舎を利用した第四喫茶棟があったが、既に取り壊され更地となっていた。また、調査区南半は駐車場として利用されていた。今回、総合研究棟が新営されることになり、1999年10月25, 26日に試掘調査を実施し、調査員1名がこれを担当した(詳細は第1章第3節参照)。

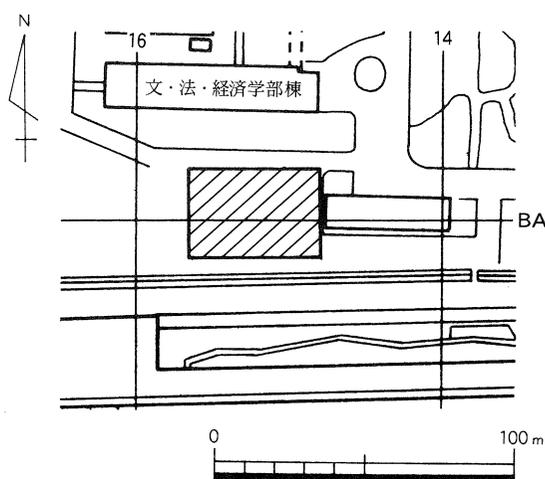


図5 調査地点の位置 (縮尺1/2,500)

試掘調査の結果、津島北地区南東の地域にも微高地が広がり、遺構が分布していることが判明した。また、調査区内で微高地と河道が確認されており、河道の利用状況も明らかにしうることが予測された。

### b. 調査の経過

以上のような試掘調査の成果をうけて、2000年1月27日から造成土の掘削を開始した。機械による造成土掘削は4日で終了し、2000年2月3日から本格的な発掘調査を調査員4名が担当して実施し、1999年度の発掘調査は3月30日で終了している。なお、発掘調査は2000年度も4

月3日から継続して実施しているが、2000年度の成果については次年度の年報で報告する。

c. 調査の成果

① 層序と地形 (図6)

現地表面の標高は約4.3mであり、地表下約1.2~1.3mが近代以降の造成土(1層)である。2層は暗青灰色を呈する明治期の耕土である。3~5層は近世の耕土と考えられる明黄褐色砂質土、6~8層は中世の水田層と考えられる灰褐色粘質土である。9, 10層は暗灰褐色粘質土であり、弥生時代後期~古代の水田層と考えられる。11層は暗褐色弱粘質土である。弥生時代中期段階に埋没した河道の上層にのみ堆積しており、河道が埋没した後、湿地状を呈していたものと考えられる。12層は弥生時代前期の暗褐色土層である。12層は調査区南東の微高地に堆積している。13層は黄褐色砂質土である。調査区北西の微高地を形成している。14層は灰褐色砂礫層であり、地山の礫層である。

本調査区では、中央部に北東から南西に流れる河道が通る。河道の両岸には微高地が広がるが、西側の微高地は津島地区で縄文時代後期の基盤層と認識している黄褐色砂質土、東側の微高地は弥生時代前期の黒色土層から形成されている。河道が埋没した後は、河道の中心部に向

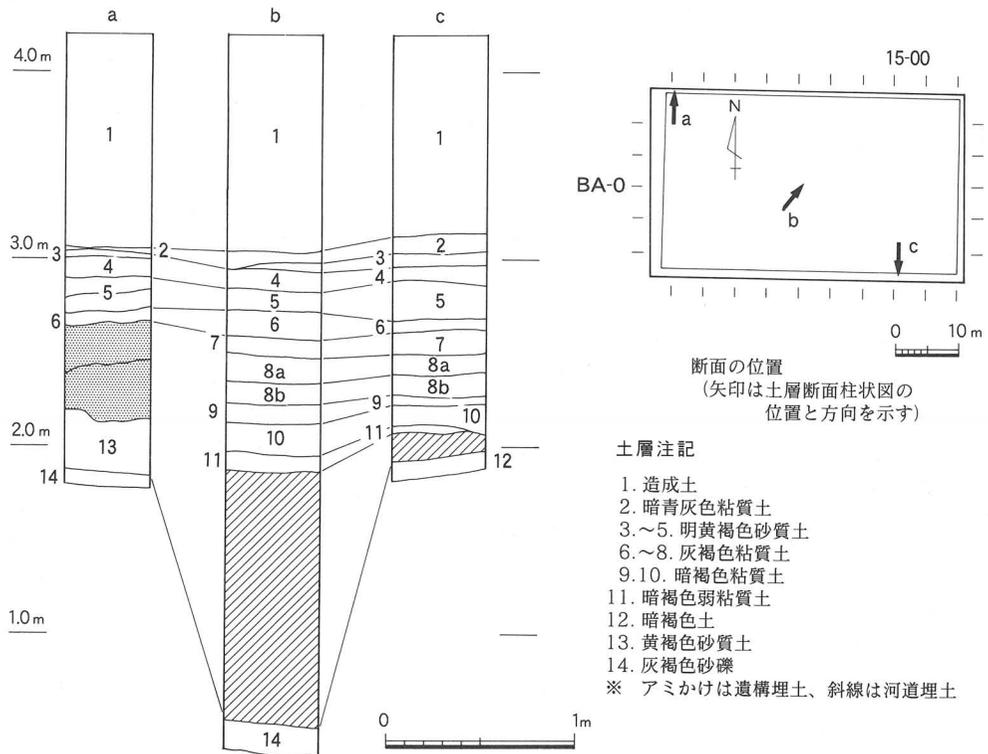


図6 土層断面柱状模式図(縮尺1/50)と断面の位置

かう若干の傾斜が認められるものの、徐々に解消され、堆積状況から中世段階にはほぼ水平な面を形成していることがうかがえる。

## ② 遺構・遺物 (図7)

調査によって確認した遺構には、明治から近世の耕地、堆積の薄い微高地上では古墳時代前期のピット群、弥生時代後期～古墳時代前期の溝群などがある。

近代では南北方向に延びる畝、近世では鋤溝と考えられる浅い耕作痕を確認した。また微高地上では古墳時代前期のピット群を検出した。このうち、1基のピットでは2個体の小形丸底壺と打ち欠いた円礫を埋納していた。丸底壺は一つは口縁部を上、もう一つは口縁部を下に向けて置かれていた。弥生時代後期～古墳時代前期の溝群は4条確

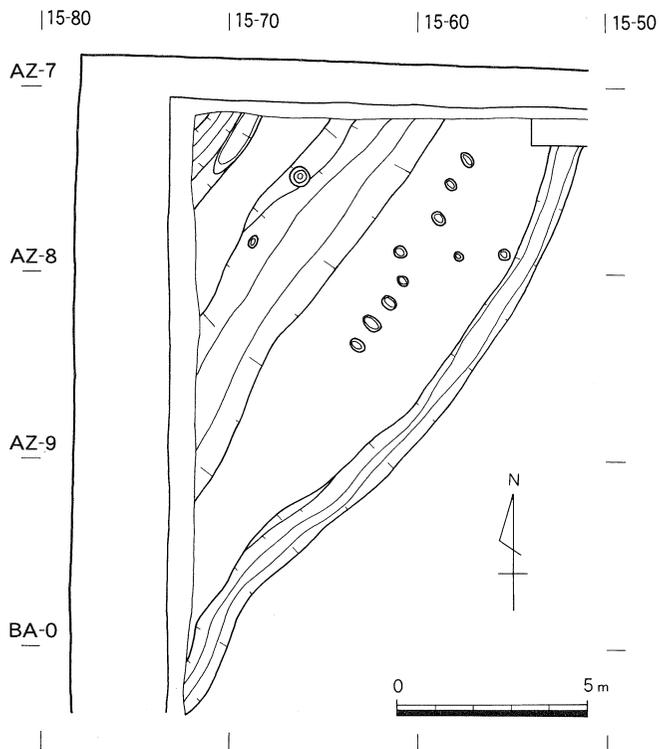


図7 弥生時代～古墳時代の遺構 (縮尺1/200)

認しているが、いずれも微高地の縁辺に並行して掘削されている。

微高地上の溝群の調査を終えたところで1999年度の調査は終了した。調査は2000年度も継続しており、弥生時代前期の河道、堰、溝等の調査をしている。2000年度の調査の詳細は次号で報告する。

### d. 1999年度調査のまとめ

1999年度は近世、中世の遺構、微高地上で弥生時代後期、古墳時代前期の遺構の調査を行った。今回の調査地点は津島北地区のなかではこれまでほとんど調査が行われてこなかった地点であり、本調査の結果、津島北地区南東の地域にも微高地が広がり、遺構が分布していることを明らかにすることができた。なお、調査は2000年度も継続しており、本報告の内容は暫定的なものであることを断っておきたい。(野崎)

## 2 鹿田地区

今年度、鹿田地区では第9～11次調査を実施した。9次調査は前年度からの継続であり、11次調査は9次調査の外縁部分の追加調査である。各調査地点は図8のとおりである。これらの地点は鹿田地区の南西部に近接しており、特に9・11次調査では合計4600㎡もの調査面積となり、主に弥生時代および中世段階の状況のより一層の理解が進んだ。

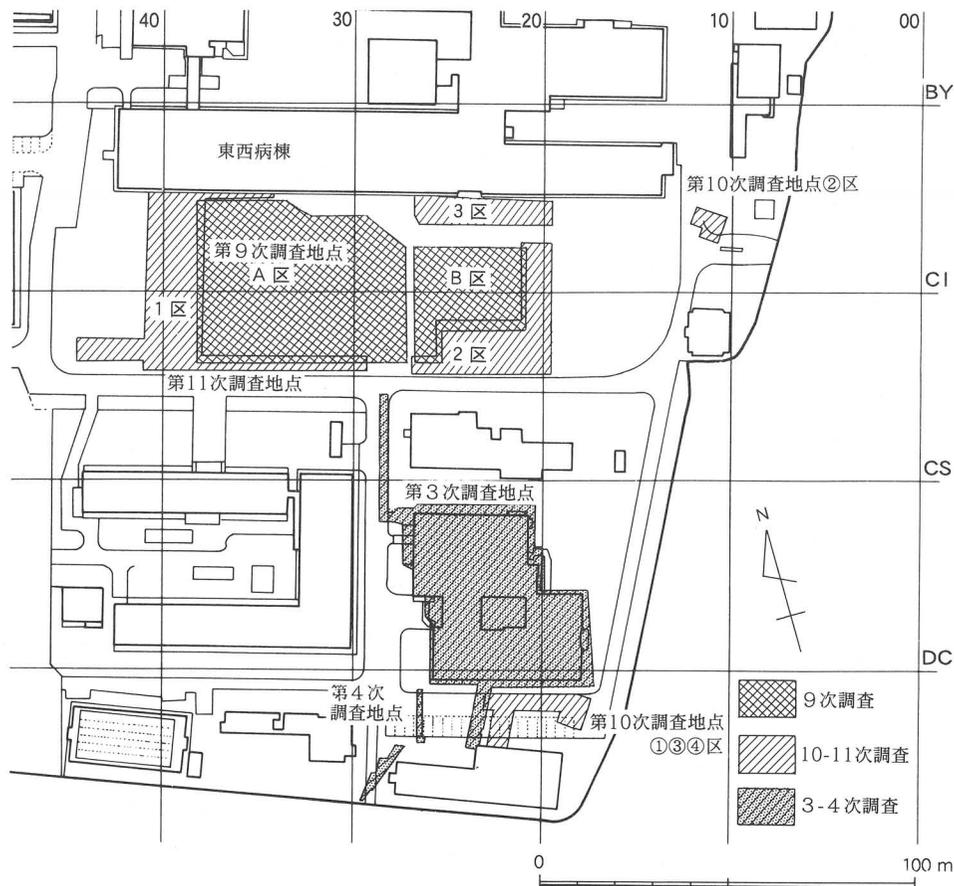


図8 鹿田遺跡第9～11次調査地点位置図 (縮尺1/2,000)

### (1) 鹿田遺跡第9次調査・鹿田遺跡第11次調査〈医学部附属病院病棟新営に伴う発掘調査 鹿田 CD～CM 19～42区〉

第9次調査は1998年度からの継続調査である。前年度分については「構内遺跡調査研究年報16」に掲載済みであり、ここでは、古代以前の調査状況について概要を述べる。また鹿田遺跡第11次調査とは隣接しているため、検出遺構図については両調査地点を併せて掲載することとする(図10・11)。さらに両調査地点の土層堆積状況については、第11次調査地点で、改めて確

認した点を加えて、両地点の共通見解として以下に記述する（図9）。

#### a. 調査にいたる経緯と経過

##### 第9次調査

第9次調査については年報16に掲載済みであるため、ここでは省略する。

##### 第11次調査

医学部附属病院病棟新営工事計画の変更に伴い、前年度から実施された第9次調査の外縁部分に拡大する形で、今回の発掘調査が行われた。

調査は1999年8月19日から12月21日の約4ヶ月にわたって行い、9月までは調査員4名、10月からは調査員6名の体制でこれにあたった。調査面積は2001.8㎡である。

#### b. 調査の概要

##### ① 層序（図9）

1層は近代以降の造成土であり、現地表面（標高3.5m前後）から約1.2m下まで堆積している。2層は淡灰褐色の粘質土層であり、近世～近代の耕作土と考えられる。3層は灰褐色～緑灰褐色砂質土で中世末～近世の遺物や炭化粒を含む。4層は灰黄褐色の砂質土で、中世の包含層である。本層は2層に細分することができる。4a層は灰黄褐色砂質土、4b層は暗灰黄褐色砂質土であり、両層とも締まりのある土層である。5層は橙灰褐色～暗灰褐色土でやや砂質を呈する。鉄分とマンガンを多く含む土層であり、4層と同じく中世の包含層と考えられる。6層は暗緑灰色～暗灰褐色を呈する土層であり、2層に細分が可能である。6a層は暗緑灰色～茶褐色土でやや砂質を呈する。白色・淡黄色微砂がラミナ状あるいはブロック状に堆積する層であり、洪水砂としての性格が考えられる。6b層は暗緑灰色～淡灰褐色土でやや粘質を呈する土層であり、一部では淡黄白色微砂がラミナ状に堆積している。この6b層上面では11次調査区の一部において水田畦畔を検出している。7層は灰黄色～暗黄灰褐色土であり、一部では3層に細分が可能である。7a層は暗黄灰褐色土でやや砂質を呈する。淡黄色微砂のブロックを多く含み、暗灰色粘土ブロックも帯状にみられる。7b層は暗黄灰色土でやや砂質を呈する。淡黄褐色微砂がラミナ状に堆積しており、鉄分や炭化粒を含む。7c層は淡橙灰褐色土でやや粘質を呈する土層であり、淡灰色粘土ブロックが少量みられる。この7c層も水田畦畔を形成している可能性のある土層であり、7b層は耕作面に堆積した土層、7a層は洪水に関連して堆積した土層と考えられる。本層の時期については明確にしがたい。8層は暗緑灰色～暗橙灰褐色を呈する土層であり、3層に細分が可能である。8a層は暗橙灰褐色土でやや砂質を呈する。暗灰色粘土ブロック、緑灰色微砂ブロックが少量みられ、鉄分を多く含む。7a層と同じく洪水砂としての性格が考えられる。8b層は暗橙灰色土で淡黄灰色微砂のブロッ

クが多くみられ、鉄分・炭化粒を少量含む。8c層は暗緑灰褐色～暗灰褐色土でやや粘質を呈する。白色粘土粒、淡橙色粘土ブロックがみられ、鉄分を含む。弥生時代の水田畦畔を形成している層である。9層は橙灰色～淡橙褐色粘質土であり、鉄分を多く含む。色調や砂の含有量に差があり、場所によってはさらに細分が可能である。いわゆる地山層であり、弥生時代の畦畔および畦畔関連の溝等が確認された層である。以下、10層は暗緑褐色粘質土、11層は青灰色粘質土であり、ともに無遺物層である。

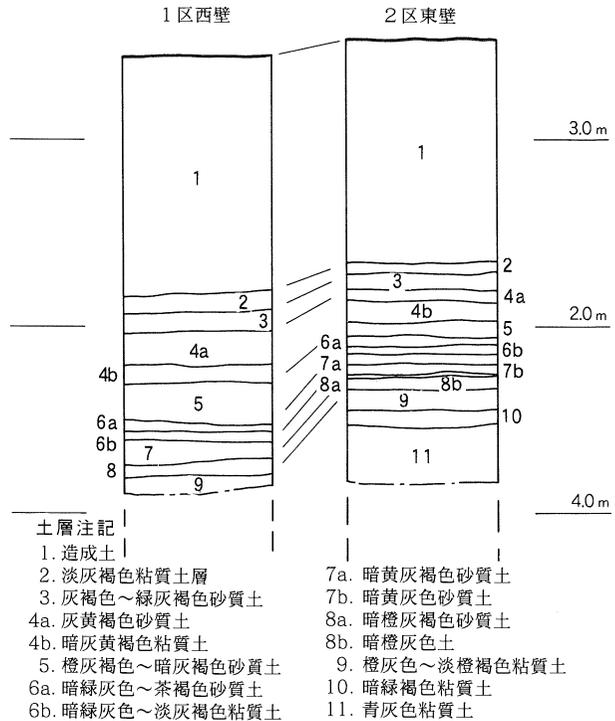


図9 鹿田11次調査地点土層断面図 (縮尺1/40)

## ② 検出した遺構・遺物

### 第9次調査

中世～近代の検出遺構については「年報16」に掲載済みであるため、ここでは省略する。古代以前の検出遺構としては、6層上面の溝群と9層上面で検出した水田畦畔がある。

#### 6層検出遺構

6層上面では、幅0.3～0.4m、深さ10cm程度の浅い溝を多数検出した。これらの溝はほぼ東西方向、南北方向に合致するものであり、耕作に関係するものと考えられる。出土遺物は少なく、時期については土層関係等から古代の範疇で考えたい。

#### 9層検出遺構 (図10 写真1)

9層は弥生時代後期頃に相当する土層である。この層の上面で水田畦畔を検出した。A区の北西から南東方向を主軸とする大畦畔と、これに直交する方向の小畦畔と小溝が検出された。この方向は本来の自然地形を利用したものと考えられる。畦畔の交差点には土器を集中して廃棄した遺構があり、水田に関係する何らかの祭祀が行われたのであろう。

弥生時代の水田址の発見は今回が初めてであり、これまでの調査で判明している集落域と合わせて、当時の土地利用形態や景観復元の貴重な資料を得ることができた。

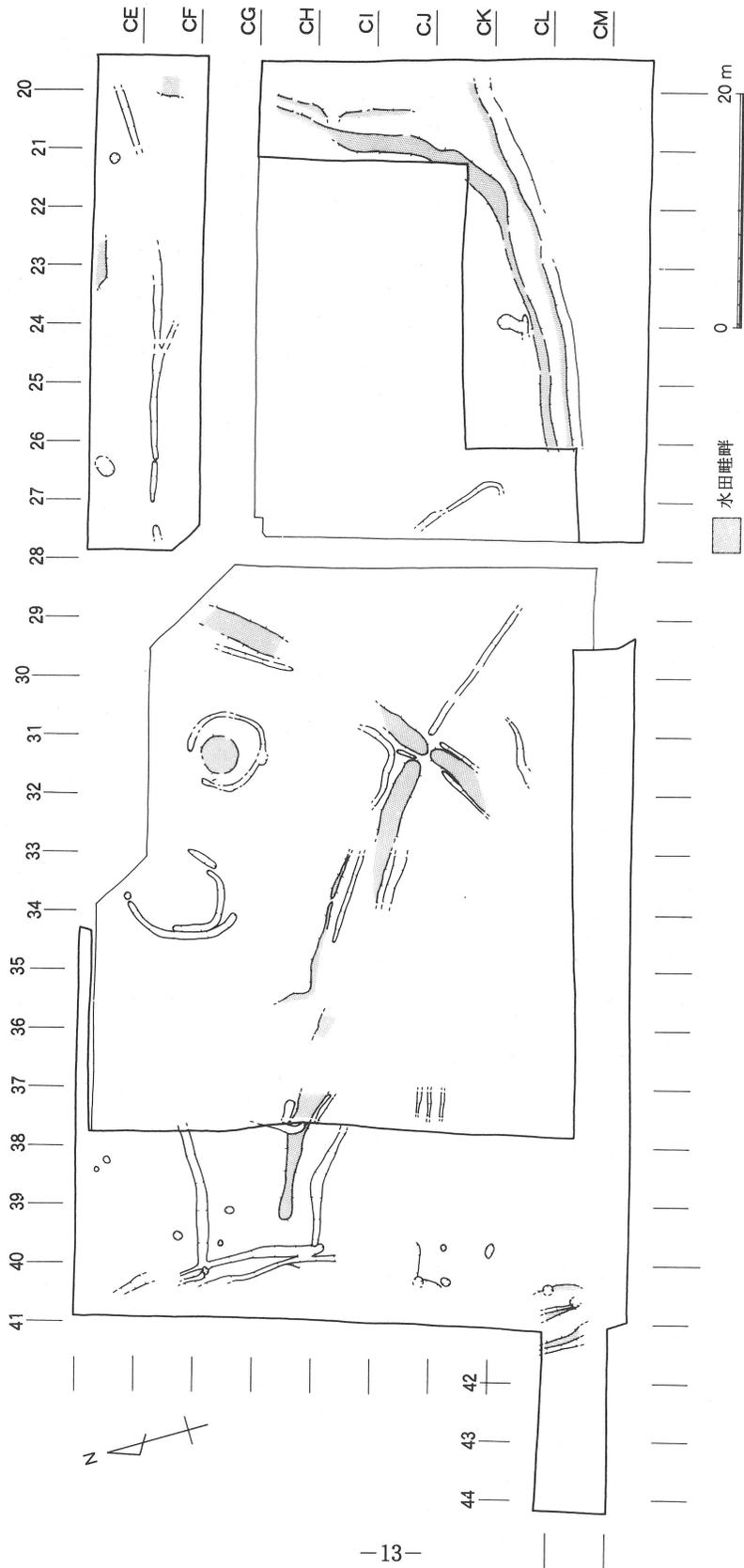


図10 鹿田9・11次調査 弥生時代検出遺構平面図 (縮尺1/600)

## 第11次調査

今回の調査区は9次調査区の外縁部分にあたり、本調査では調査地点の中央を走る共同溝を境に西側を1区、南東側を2区、北東側を3区とした(図8)。9次調査の成果から、古代～近世の溝・柱穴群、弥生時代の水田畦畔等の存在が予想された。検出した主な遺構と遺物は次の通りである。



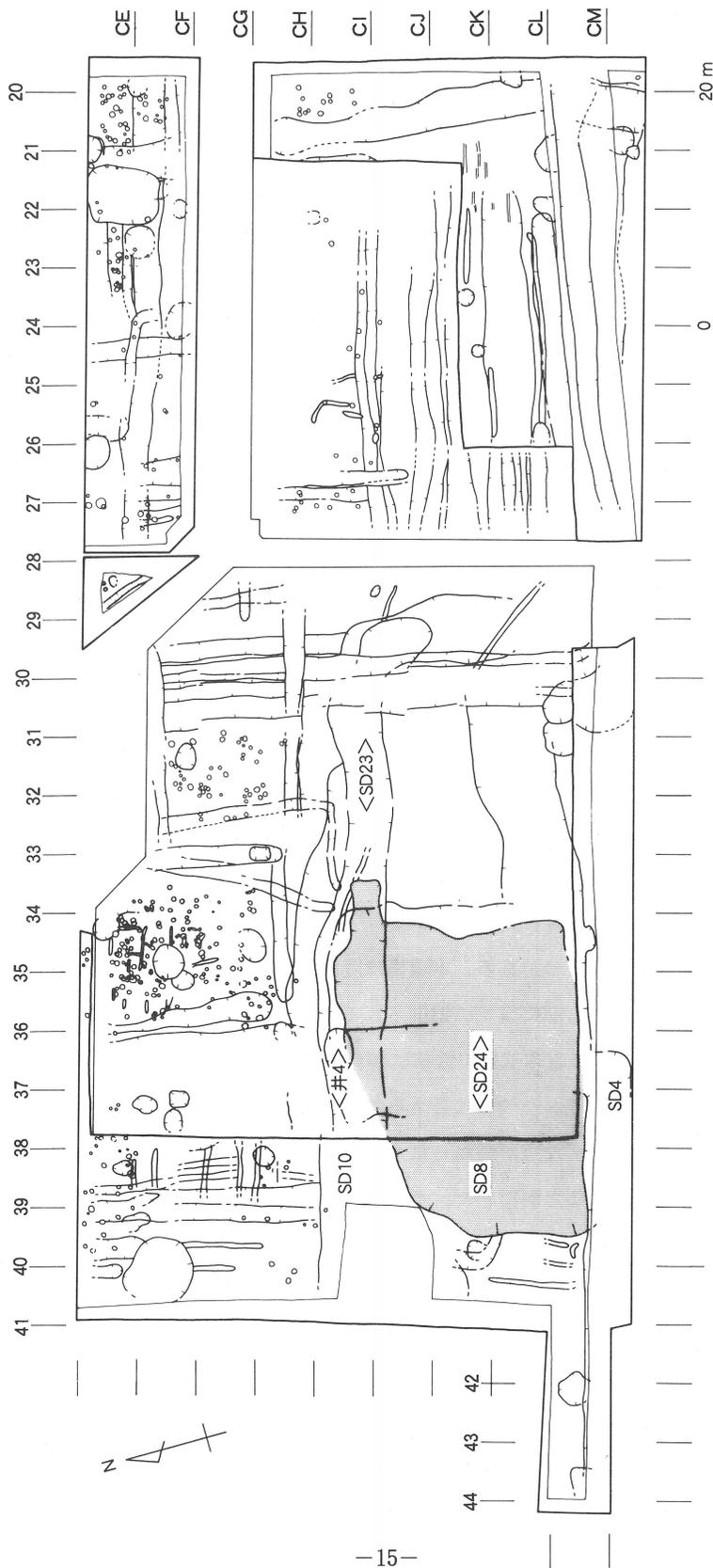
写真1 弥生時代検出水田畦畔(北より)

### 2, 3層検出遺構

近世以降に相当する層である。1区および2区・3区を南北に走る大溝(1区SD 2, 2区・3区SD 1)を検出した。これらの大溝は鹿田遺跡第9次調査(以下、鹿田9次)で検出した大溝の延長部分にあたる。また1区と2区の南端付近では東西方向の溝を検出した(1区SD 3, 2区SD 2)。この溝は杭列を伴っており、杭間に板状の横木を設置している状況(おそらく護岸用の設備と考えられる)が一部において確認できた。この他、2区の南半部で土坑数基を検出している。

### 4, 5層検出遺構(図11)

中世(平安時代末～室町時代)に相当する層である。4層では北側を中心に遺構密度が高く、各調査区で溝や柱穴群、井戸等を検出している。1区は、調査区の中央付近を東西方向に横切の大溝(1区SD 10:鹿田9次A区SD 23)を境に、北と南で様相が異なる。北半部では中・小規模の溝が南北方向を中心に数条みられ、北側を中心に柱穴群のまとまりを認めることができる。この他、井戸や土坑を数基検出している。一方南半部では遺構が希薄であり、東西方向の大溝(1区SD 4)以外では、小規模の溝や井戸、土坑が少数みられる程度である。なお、このSD 4の底付近で墨書の痕跡を残す木簡が出土している。このように北と南で様相が異なるのは2区と3区についても言えることである。2区では東西方向と南北方向に数条の大溝が走るのに対し、3区では中・小規模の溝数条と大小の井戸・土坑数基、および北東周辺に集中する柱穴群の存在が確認できた。これに対し、5層では全体的に遺構が希薄であり、小規模の溝や柱穴がわずかにみられる程度であるが、この時期に1区南半部では大規模な遺構(1区SD 8)が営まれている。本遺構は9次調査で「入り江状の遺構」としていた遺構(鹿田9次A区SD 24)の延長部分にあたり、その結果本遺構は1辺約25mの方形に近い遺構となるこ



図中の<>付連構番号は9次調査分、その他は11次調査分である  
 図11 鹿田9・11次調査 中世検出遺構平面図 (縮尺1/600)

とが判明した。

#### 6, 7層検出遺構

6層では1区を中心に、小規模の溝が南北方向を中心に10数条みられた。これらの溝のほとんどは、上層で検出した遺構の掘り残しである可能性が高いものであろう。また、各調査区では一部において6層の水田畦畔を検出することができたが、出土遺物が少ないため、詳細は不明である。

#### 8, 9層検出遺構 (図8)

弥生時代に相当する層である。2区を中心に各調査区において大・中規模の畦畔を検出した。また、これらの畦畔にとりつく小規模の溝や導水施設状の遺構を確認することができた。鹿田9次の調査成果とも考えあわせると、北西-南東方向およびそれと直交する方向を軸に水田畦畔が広がっていたのであろう。

#### c. 総括

11次調査では9次調査で確認された遺構の存続状況およびその性格究明に焦点が絞られた。その結果、鹿田9次の調査成果を再確認、あるいは修正すると同時に、新たな知見も得ることができた。

鹿田9次および11次調査で明らかとなった中世相当期の遺構のあり方は、両調査地点の北端部に生活領域の中心が存在することを示している。一方南側については東西および南北方向に大溝が掘削されている。後の時代にも同一の場所で継続的に大溝が掘削・使用されており、「居住領域」や「生産領域」といった集落内空間が、こうした大溝によって整然と区画されていたことを窺わせる。また、9次調査において「入り江状の遺構」としていた遺構の範囲がほぼ確定できたことも成果の一つである。本遺構は鹿田遺跡が最盛期を迎える12世紀中頃～14世紀(鎌倉～室町時代)よりも前にすでに掘削されており、鹿田遺跡の土地利用のあり方を考える上で重要な資料といえよう。本遺構の性格については不明な点が多いが、「溜池」のようなものとして機能していた可能性が一つには考えられる。

さらに、9次調査では不明な点が多かった6・7層相当期の状況についても、今回の調査で水田畦畔の一部を検出することができた。このことは弥生時代に当地点が生産領域として機能していたことを示しており、重要な成果といえよう。

以上が今回の調査成果であるが、層位および各遺構の帰属時期については出土遺物の詳細な検討を待たねばならず、上述の内容はあくまで暫定的なものである。 (喜田・岩崎)

#### (2) 鹿田遺跡第10次調査 (医学部共同溝敷設に伴う発掘調査 鹿田CD・CE 10～12, DD～DF 16～22区)

### a. 調査にいたる経緯

鹿田地区の基幹整備に伴い、医療技術短期大学部周辺において共同溝の設置が計画された。医療短期大学部では1986年度から1987年度にかけて実施した校舎新営に伴う発掘調査（鹿田遺跡第3・4次調査）において古代から中世にわたる多くの遺構が検出されている。とくに今回の工事予定地の西端部分に隣接する地点では、古代の河道に掛けられた橋脚遺構が良好に検出されており、重要な遺構・遺物の存在が予想されることから、発掘調査を実施することになった。

### b. 調査の経過

共同溝設置予定地のうち、①区（発進立坑31.4㎡）、②区（到達立坑・現場打ち共同溝40.2㎡）、③区（ヒューム管・高圧マンホール45.7㎡）、④区（PCボックスカルバート107.2㎡）の各部のみが遺物包含層の深度にまで到達すると予測され、工事の手順との関係から、①、②、③、④の順に日程を分けて発掘調査を行った。調査期間は①1999年5月7日から20日、②1999年6月21日～7月6日、③1999年9月6日～9月20日、④1999年9月26日～10月14日で、調査員1名が担当した。

### c. 調査の成果

①、③、④区は互いに隣接しているが、②区は医療短期大学部校舎を挟んで北に離れた位置にあるため、旧地形や層序の様相も異なる。従って、①・③・④区と②区を分けて報告する。

#### ① 層序

##### ①③④区

現地表面から1.4mは近代以降の造成土（1層）である。2層は青灰色の砂質土である。3層は暗灰色の粘質土で、暗黄褐色粘質土のブロックを多く含む。2、3層は近代の耕作土であると考えられる。4層は淡灰褐色の砂質土で、鉄分とマンガンを多く含む。5層は灰褐色の砂質土で、鉄分とマンガンを多く含む。4、5層はいずれも近世の耕作土と考えられる。6層は灰色の砂質土で、少量の鉄分と多量のマンガンを含む。中世の土器片を含むことから、中世の層と考えられる。7層は灰黄褐色の砂質土で、鉄分とマンガンを多く含む。8層は灰褐色の砂質土で、少量の鉄分とマンガンを含む。9層は明灰色の粘質土で、ラミナ状に砂を含む。10層は暗灰色の粘質土で、粘性が強い。7層以下は鹿田遺跡の基本層序とは対応せず、鉄分を多く含むことから、古代の河道の埋土と考えられる。

##### ②区

現地表面から1mが近世の造成土（1層）である。2層は淡灰色の砂質土で、小礫を多く含む。近代の層に比定できる。3層は灰褐色の砂質土で、鉄分を多く含む。4層は暗灰褐色の砂質土で、マンガンを多く含む。3～4層は近世の層と考えられる。5層は灰褐色の砂質土で、

マンガンを多く含む。5, 6層はいずれも中世の土器を含むことから、中世の層と考えられる。7層は暗褐色の粘質土で、非常にしまりがよく、多量の鉄分と少量のマンガンを含む。いずれも少量の弥生土器を含む。9層は灰黄褐色の粘質土で、鉄分を多く含む。遺物は出土していない。9層は南に向かってレベルが低くなっており、8層も同様に南に傾斜している。8層の低い部分にさらに7層が堆積している。

② 概要

①③④区

医療短期大学部校舎南側にあたる①③④区では、中世の遺構は確認できなかった。先の校舎新営に伴う調査でも、今回の調査区に近い範囲では中世の遺構が希薄であり、校舎の北側に遺構が集中する様相が追認できた。

一方古代の遺構については、③区及び④区西端で検出した杭群がある(写真2)。西に隣接する医療短期大学部校舎南共同溝部分(鹿田遺跡第3次調査C地区)では、大型の杭を打ち込んだ橋脚と思われる遺構を検出しており、今回の調査で検出した杭群も、それに伴うものと考えられる。

②区

②区で検出した遺構としては、まず近世の溝1条が挙げられる。溝は到達立坑部分の中央付

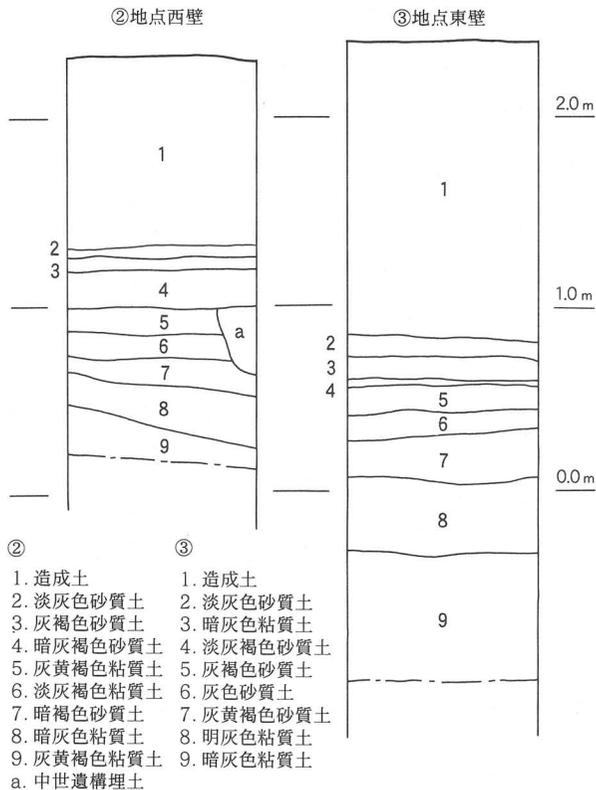


図12 鹿田10次調査土層断面図 (縮尺1/40)

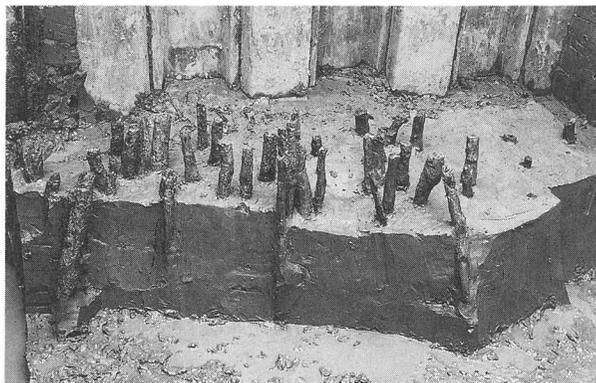


写真2 ③区杭群検出状況

近を東西方向に流れる。多量の陶磁器や瓦が出土し、また、溝の両肩に1 m程度の間隔をあけて杭が打ち込まれていた。護岸を目的とする施設と考えられよう。さらに、弥生時代の遺構としては、現場打ち共同溝部分でピットを1基検出した。ピットの中からは弥生時代後期後半の壺形土器が1点、つぶれた状態で出土しているが、復元すればほぼ完形になると考えられる。

d. まとめ

今回の調査は、調査面積が小さいにも関わらず、いくつかの成果が挙げられた。まず、①③④区では、第3次調査に引き続いて古代の大規模な河道を確認し、さらに橋脚に関連する杭列を検出することができた。また②区では、調査区の北に向かって微高地が形成され、この付近まで弥生時代後期の遺構が広がっている可能性が指摘できた。

以上が今回の調査の成果である。なお、本調査は現在整理中であり、上述の内容は暫定的なものであることを断っておく。 (豊島)

### 第3節 試掘調査

本年度は、津島地区において2件の試掘調査を実施した。以下に概要を記す。

#### 1 津島地区

##### (1) 津島地区総合研究棟校舎新営に伴う試掘調査

###### a. 調査に至る経緯

当調査地点は津島北地区に所在する文・法・経済学部2号館の南に位置する総合研究棟建設予定地とされる地点である。この地点には旧日本陸軍の旧兵舎を利用した第四喫茶の建物があり、その南は駐車場として利用されていた。しかし既に第四喫茶は取り壊されており、試掘時点では更地となっていた。

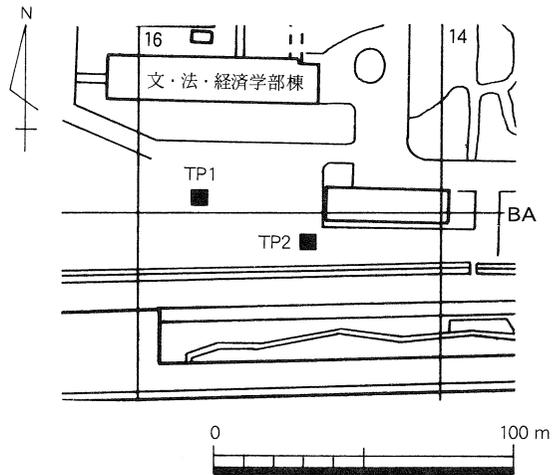


図13 調査地点の位置 (縮尺1/250)

さて、総合研究棟建設予定地周辺ではこれまで1981、82年に岡山市教育委員会によって合併処理槽埋設、校舎新営の際に工事立会あるいは試掘調査を行っているが、遺構・遺物等は確認されていない。また、それ以後に行われた立会調査も掘削深度が大きいものは無く、判断材料となるデータは皆無という状況である。そこで今回試掘調査を行ってデータを得ることとした。

調査は建設予定範囲の北西と南東の2ヶ所に試掘坑を設けて行った(図13)。試掘坑は北西をTP1(2×2m)、南東をTP2(2×2m)とした。調査は1999年10月25,26日に実施し、調査員1名がこれを担当した。

b. 調査の成果(図14)

① TP1

TP1は建設予定地の北西に設定した。現地表面の標高は約4mであり、地表下約0.8mが近代以降の造成土である。以下、上層から順に土層説明を行う。2層は暗青灰色を呈する明治期の耕土、3~5層は近世の耕土と考えられる。3,4層は明茶褐色の砂質土であり、上面においては鉄分の沈着が顕著にみられる。5層は灰茶褐色の弱い粘性を帯びた土である。この層も鉄分の沈着が著しい。6層は灰褐色粘質土である。7層は明灰褐色粘質土である。粘性が強い。津島地区の他地点の堆積状況を参考にすれば中世段階の水田層と考えられる。8層も明灰白色の粘質土である。上面には鉄分の沈着が著しい。この層では壁面で土器片を採集すること

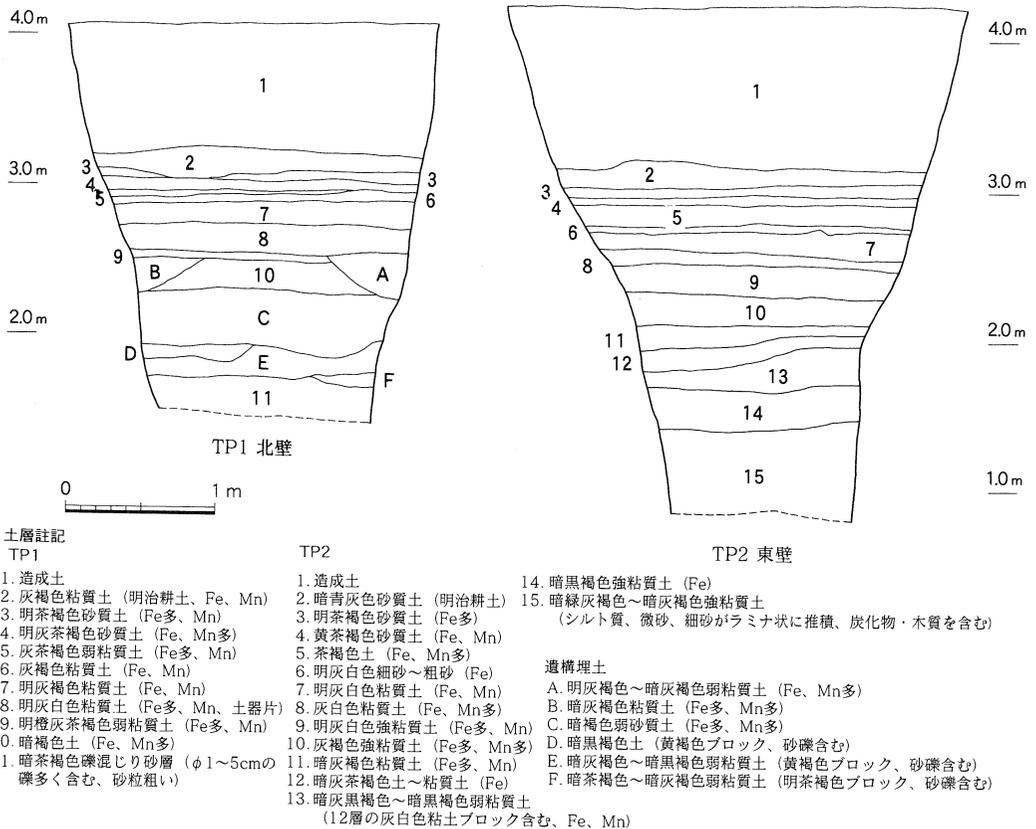


図14 土層断面図(縮尺1/50)

ができた。ただし、細片であり、時期を比定するには至らなかった。9層は明橙灰茶褐色弱粘質土である。上面には鉄分の沈着が著しく、マンガン粒を多く含む層である。この層では遺構を確認することができた。10層は暗褐色土である。津島地区で「黒色土」と呼んでいる縄文時代晩期から弥生時代前期の鍵層にあたる可能性もある。この層でも土器片を採集することができたが、時期を特定するには至らなかった。11層は暗茶褐色の礫混じり砂層である。径が1～5cm程度の礫を多く含み、稀に長10～15cmの礫を含む。砂の粒子が粗く、河道が通っていた可能性も考えられる。この試掘坑では縄文時代後期の基盤層と考えられる黄褐色砂質土層は確認されなかった。

## ② TP 2

TP 2は建設予定地の南東に設定した。現地表面の標高は約4.2mであり、地表下約1mまでが近代以降の造成土である。2層は暗青灰色砂質土で、明治期の耕土である。3～5層は近世の耕土である。3、4層は上面に鉄分の沈着が著しい。6～9層は中世の耕土と考えられる。6層は明灰白色粗砂であり、洪水砂と考えられる。7～9層はいずれも灰白色を呈する粘質土であり、とりわけ9層は粘性が非常に強い。10、11層は灰褐色を呈する粘質土であり、古墳時代～古代の堆積層と考えられる。この11層の上面までは各層ともほぼ水平に堆積し、地形は平坦化されるが、12層以下は下位の地形の影響を受けている。12層は暗灰茶褐色粘質土である。13層は暗灰黒褐色粘質土である。「黒色土」と呼称している鍵層に色調が似るので、弥生前期の層とも考えられるが、断定する材料は得られなかった。14、15層は河道埋土と考えられる層である。14層は暗黒褐色強粘質土である。15層は暗緑灰褐色～暗灰褐色強粘質土である。シルト質土、非常に細粒の砂粒、微砂、細砂がラミナ状に堆積する。層中に炭化物を含む。また、この調査区の掘削底面では木質層を確認することができた。

## c. まとめ

今回の試掘調査はこれまでほとんど調査のデータの無い地点で行ったものであり、津島北地区南西の土層の堆積状態や埋蔵文化財の包蔵状況を知るうえで重要な成果をあげることができた。TP 1では「黒色土」と考えられる層が標高2.2m、明治耕土上面からは約0.9m下位の位置で確認された。津島地区の他地点の成果をあわせて考えれば、「黒色土」の確認された深度は浅く、予定地の北西は微高地ないし微高地に近い地点であることが考えられる。また、TP 2は「黒色土」に似た色調の13層以下の堆積が、河道の埋土と考えられるラミナ状の堆積であり、調査区南東には河道が通ることが予想される。

今回の試掘調査の結果、津島北地区南東の地域にも微高地が広がり、遺構が分布していることが判明した。また、調査区内で微高地と河道が確認されており、河道の利用状況も明らかにしうる可能性もある。いずれにせよ発掘調査でこの地域の土地利用の状況を確認する必要がある。

ろう。(野崎)

(2) 工学部電波暗室新営に伴う試掘調査

a. 調査の経過

調査地点は工学部機械工学科実験棟の東側，工学部ゴミ収集場の西側にあたる。1999年度にこの地点に電波暗室の建設が予定された。建物自体はプレハブ仮設であったが，面積143㎡と100㎡を超えるものであるため，建設予定地内に1カ所の試掘坑を

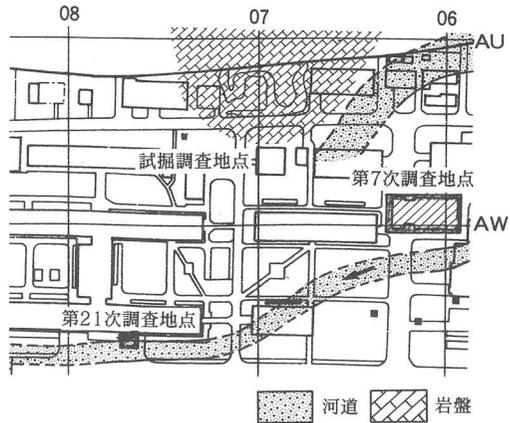


図15 工学部電波暗室予定地試掘調査地 (縮尺1/5,000)

設け，地形の確認を行うこととした。調査は2000年2月23日に行い，調査員1名が担当した。

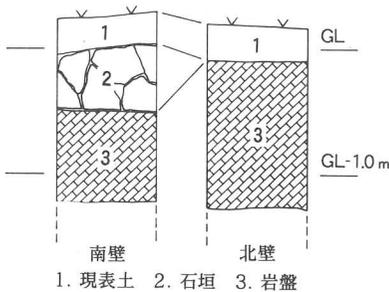


図16 土層断面図 (縮尺1/60)

b. 調査の概要

まず重機によって2.5m四方の試掘坑を掘削し，その後断面観察と記録を行った。厚さ0.2m程の現表土(1層)の下は試掘坑北壁では岩盤(3層)である。南壁では，現表土の下に0.5mの高さの石垣(2層)が作られており，その直下が岩盤であった。

c. まとめ

調査地点の北東約30mの地点には，半田山山塊から南に伸びる丘陵先端の岩盤塊が保存されており，調査地点一帯までこの岩盤が続いていることが確認された。近年の調査成果から津島地区東北隅地域を中心に旧地形の復元が進みつつあり，今回の試掘調査結果によっても，有益な資料の蓄積が進んだと言えよう。(岩崎)

第4節 立会調査

(1) 津島地区 (図23 表1)

1999年度における津島地区の立会調査は事業別にみると19件，計74箇所で行った。このうち半数近くは，造成土内で掘削が終了している。ここでは掘削深度の深かった調査について詳細を記す。

調査8は津島地区全域で行われている外灯設置工事に伴う調査である。このうち津島北地区の南東部分で行った調査では，地表下約0.85~1.0mのところでは黒色土を確認している。周囲の調査地点よりも浅いところで黒色土を確認しており，この地点が比較的地形の高い部分に位

置していたと想定できる。

調査12（コラボレーションセンター新営に伴うハンドホール設置）A地点は、津島岡大遺跡第5次調査地点の西側に位置する。地表下2.1mまで掘削している。造成土以下で8層を確認しており、古墳時代後期と考えられる灰褐色粘質土層まで掘削が及んでいた。

調査13（環境理工学部校舎（Ⅱ期）新営に伴うスロープ工事）は、津島岡大遺跡第22次調査地点の西に隣接している。地表下3.5mまで掘削したが、土層や遺構の状況は22次調査地点と概ね同じである。黒色土の下面を精査し、縄文時代後期のピット1基を検出した。

調査42（コラボレーションセンター新営に伴う排水樹設置工事）は、津島岡大遺跡第19次調査地点の南側に隣接している。地表下1.1mまで掘削しており、黒色土に対応する層までを確認した。土層の堆積状況は、19次調査地点と概ね同じである。

## （2）鹿田地区（図17～20・表1）

鹿田地区の立会調査は事業別にみると23件、計53箇所で行った。このうちの多くは、造成土内か近世層までの掘削であった。調査18（基礎医学棟新営に伴う検水槽設置工事）と調査41（病棟新営に伴う共同溝解体工事）、調査46は掘削のおよぶ面積がまとまっていたため、土層断面の観察および記録に重点をおいて調査を行った。

調査18地点は第7次調査地点（医学部校舎）の西側に位置する（図17）。調査面積は7.6㎡で、近世層、中世層、古墳時代に帰属すると考えられる層と基盤層を確認した（図18）。遺構としては、近世に属する溝と中世では柱穴と東西方向に走る溝を確認している。

調査27（基幹整備（電気設備）地中配管工事①）は、地表下1.25mまで掘削が行われ、造成土以下7面の土層を確認した。時期の分かる遺物が出土しておらず明確な時期は明らかにできないが、近世から中世に帰属すると考えられる。造成土厚は0.5m前後である。地表下1.0mの

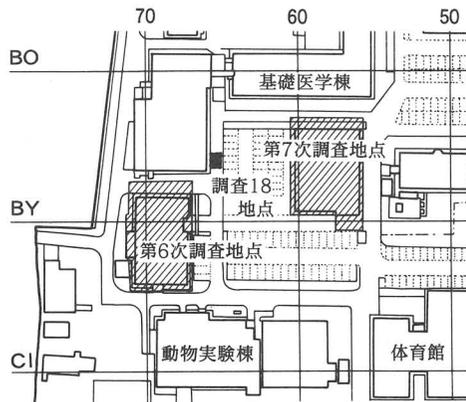
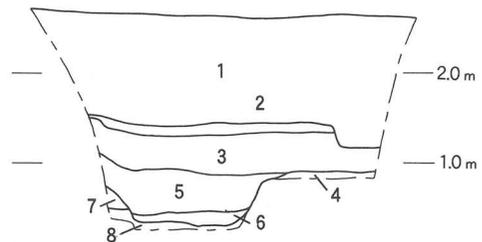


図17 調査18地点位置図（縮尺1/2,500）



- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1. 造成土          | 5. 暗灰褐色砂質土（中世溝） |
| 2. 暗灰色粘質土（近代？）  | 6. 青灰色粘質土（中世溝）  |
| 3. 暗灰褐色砂質土（近世溝） | 7. 明茶色砂質土       |
| 4. 灰褐色砂質土（中世）   | 8. 青灰色粘質土（基盤層）  |

図18 調査18地点東壁断面図（縮尺1/50）

ところで炭や焼土や土器片を含む土層を確認しており遺構の可能性もある。②地点では地表下1.3mまで掘削が行われた。造成土厚は0.45m前後で、近世層2面とその直下で中世の遺構の埋土を確認した。

調査41は、鹿田遺跡第11次調査で建築工事の都合によって本調査の際に発掘できなかった部分である。調査面積は7.5㎡で、調査は第11次調査地点の10層まで行った。遺構としては、中世の溝1条と浅い土坑1基、ピットを2基検出した。また、第11次調査地点の4層に対応する層で、多数の中世の土器が出土した（平面図については図11に掲載）。

調査46（病棟新営その他工事污水管・桝）は、グラウンドの東辺を長さ80m、幅1m、深さ2.0~2.3mにわたって掘削した（図20）。距離が長く、また周辺での調査事例があまり多くないため、土層断面の観察と記録に重点を置いて調査を行うことにした。調査47（防球ネットポー

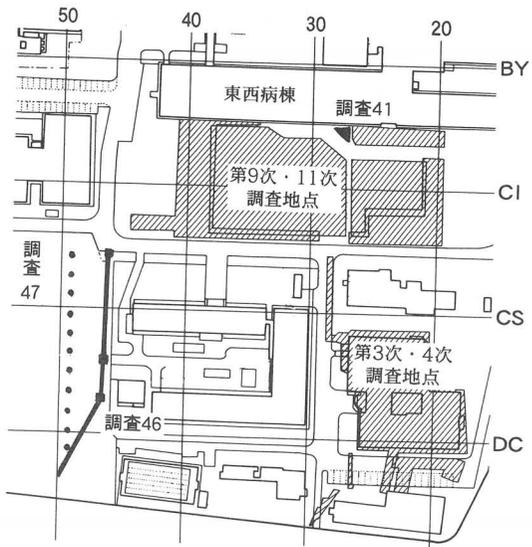


図19 調査41・46・47地点位置図（縮尺1/3,000）

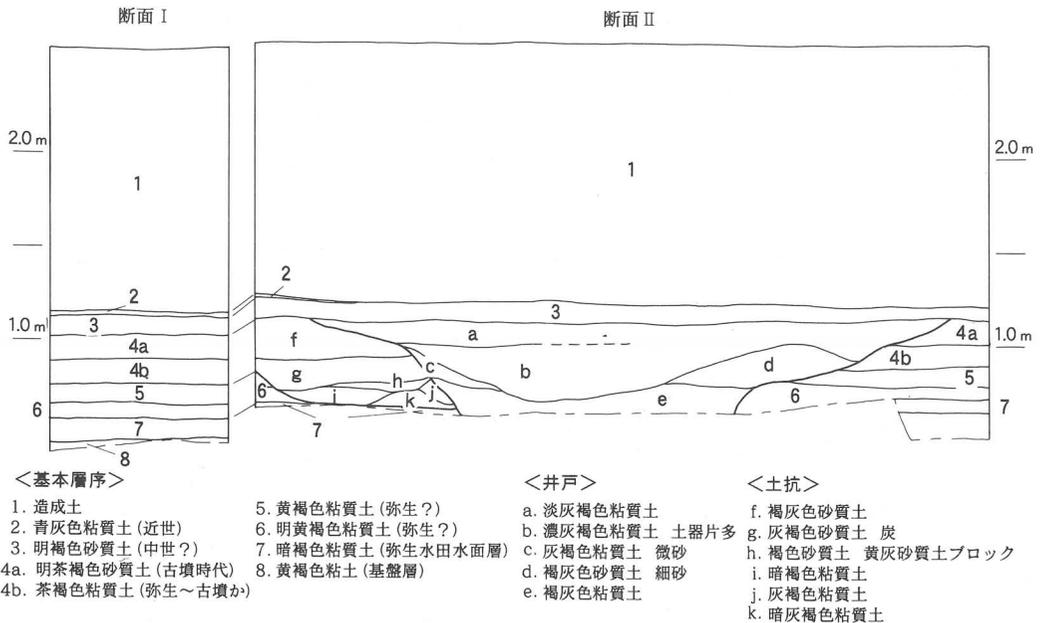


図20 調査46地点西壁断面図（縮尺1/40）

ル設置工事)とあわせ地形復元で重要な知見を得ることができた(図21)。a区間の北側1/3では中世と考えられる東西方向の溝を確認している。a区間の南側2/3は微高地上に位置しているようである。この部分では、中世の土坑や柱穴や東西方向の溝、古墳時代初頭頃の井戸を確認した。井戸からは甕の破片が多数出土した。また、b区間からc区間にかけては中世と考えられる幅の広い東西方向の溝を多数確認した。

調査47は、グラウンドの東辺で11ヶ所を、径40cmのオーガーで深さ2mまで掘削が行われた。掘削範囲が狭かったため、直接土層断面を観察することはできなかった。しかし、上げ土を観察することで大まかな土層を把握することができた。土層の状況は、前述した調査46と概ね同じような状況であり、調査41で確認された状況を補強するものであった。

調査48(病棟新営その他工事污水検水柵)は、地表下約2.0mまで掘削し、基盤層にまで達していた。近世層を2面、中世層を2面、古墳時代と考えられる層と弥生時代の層を確認した。近接した第7次調査地点では、古墳時代前期から近世の遺構が見つかるが、本調査地点では遺構等は確認できなかった。(横田)

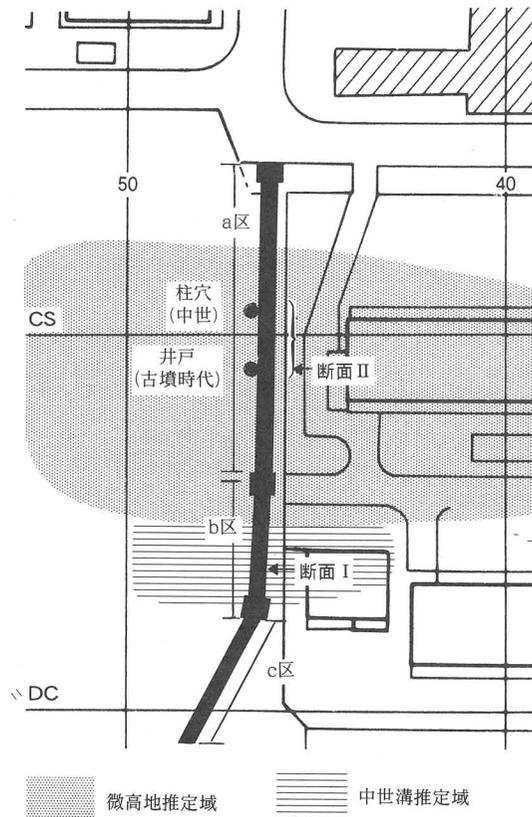


図21 調査46地点概略図(縮尺1/1,000)

表1 1999年度調査一覧

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
1	発掘	鹿田	CD33-37, CE-CF 28-37, CG-CJ 20-37, CK-CL 25-37	医病	病棟新営に伴う調査	98.11.27~99.5.11	1.7	面積2415㎡。弥生時代水田畦畔, 古代池状遺構, 中世溝・井戸・柱穴群, 近世~近代溝など確認<鹿田遺跡第9次調査>
2	発掘	津島	AW02.03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う調査	99.3.1~7.12	3.5	面積773㎡。縄文後期ビット・河道, 弥生前期河道・中期溝・後期河道, 古墳~近代溝・水田畦畔等確認<津島岡大遺跡第22次調査>
3	発掘	鹿田	CD・CE10-12, DD-DF16-22	医	共同溝設置に伴う調査	99.5.7~10.14	3.3	面積244.1㎡。ヒューム管・高圧マンホール・PCボックスカルバート地点では古代の杭列, 到達立坑部分では弥生ビット, 近世溝。<鹿田遺跡第10次調査>

1999年度岡山大学構内遺跡調査報告

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
4	発掘	鹿田	CD-CM19-42	医 病	病棟新営に伴う調査	99.8.19~12.22	1.7	面積2020㎡。弥生時代水田畦畔、古代池状遺構、中世～近世溝・井戸・ピット群等確認<鹿田遺跡第11次調査>
5	発掘	津島	AZ15.BA14	文法経	総合校舎新営に伴う調査	00.2.3~3.31	0.8	面積1339㎡。弥生時代後期～古墳時代前期の溝、古墳時代ピット群確認<津島岡大遺跡第23次調査>
6	試掘	津島	AZ15.BA14	文法経	総合校舎新営に伴う調査	99.10.25.26	①2.7、 ②3.5	①標高2.2mで黒色土、以下礫混じり砂層＝微高地状、②標高1.9mで黒色土近似層、以下河道状の堆積確認
7	試掘	津島	AV08	工	電波暗室新営に伴う調査	00.2.24	1.2	現表土以下、基盤となる岩盤層
8	立会	津島	—	施	構内外灯設置工事	99.4.1~99.4.7	1.15~1.35	28箇所。うち3箇所で黒色土確認。
9	立会	津島	AV03,AW03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う集水樹・ガス管理設	99.4.1	0.8~1.75	近世層まで掘削
10	立会	津島	AW02.03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う生活排水・実験排水樹	99.4.2~5.6	0.8~1.5	15箇所。うち1箇所で中世層まで掘削
11	立会	鹿田	CN14,DDDE1617, BG-CL45, CC-CF09-12, DH17	医 病	基幹整備(共同溝) ①水道引き込み②樹撤去③樹木移植 ④埋設物確認⑤仮設電柱	99.5.26~6.22	0.9~2.0	②④では近世層上面まで
12	立会	津島	AZ08.09	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うハンドホール	99.6.14~16	1.48~2.1	2箇所。うち1箇所で古墳時代層まで掘削
13	立会	津島	AW02	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴うスロープ設置工事	99.7.27	3.5	面積25㎡。黒色土下面を精査。近代土坑、古代溝、縄文後期ピット確認
14	立会	鹿田	DG-DJ27.28, BX32	医 病	基幹整備(機械設備)ガス管	99.8.3,4	0.7~1.2	造成土内・既設工事内
15	立会	鹿田	BV65-71	医	研究棟新営に伴う給排水樹・管	99.8.9	1.2~1.4	中世層まで掘削
16	立会	鹿田	CD38・39	医	樹木移植	99.8.9	1.04	造成土内
17	立会	津島	BA10	理	コラボレーションセンター新営工事に伴うガス管	99.8.18	1.2	造成土内
18	立会	鹿田	BU65	医	研究棟新営に伴う検水槽	99.8.18-20	2.2	面積8.2㎡。近世溝、中世溝・ピット確認
19	立会	鹿田	BG12. CN27. CN24, CM1	医 病	基幹整備(機械設備)屋外配管	99.8.27-9.22	1.16~1.47	4箇所。近世層まで掘削
20	立会	鹿田	AE56, 61, 65	医 病	分子細胞施設棟外灯設置	99.9.27	1.1	造成土内
21	立会	鹿田	BR-BY55	医	研究棟新営に伴うガス管理設	99.10.6	1	既設工事内
22	立会	鹿田	BR55-61	医	研究棟新営に伴う医療ガスピット	99.10.12	0.7	既設工事内
23	立会	鹿田	BT-CB54	医	研究棟新営に伴う給水樹	99.10.13, 10.29	0.7~1.15	近世層まで掘削
24	立会	鹿田	CE08-10	医 病	基幹整備(共同溝)	99.10.28, 11.2	1.1~1.5	近世層まで掘削
25	立会	津島	AV05	施	工学部情報工学科棟東側道路陥没復旧工事	99.10.29	0.9	既設工事内
26	立会	津島	BF08	環	第一喫茶取り壊し	99.10.29	0.55~1.13	明治層まで
27	立会	鹿田	BY42-44, B143-44	医 病	基幹整備(電気設備)地中配管	99.11.2.11.6	1.25~1.45	中世層まで掘削, 時期不明の遺構埋土確認
28	立会	津島	AY08-09, AZ10-11	理	コラボレーションセンター新営に伴う屋外配管	99.12.20-00.1.7	0.88~1.1	5箇所。うち2箇所で明治層まで
29	立会	鹿田	AE41	医	路面電車関連地質調査	00.1.11	1.5	灰色粘土層まで
30	立会	鹿田	CL-CM69, CM1	医 病	病棟新営に伴う樹木移植	00.1.17-1.19	0.8	近世遺構確認
31	立会	津島	AW03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴うガス管	00.1.17	1.1	近世層まで掘削
32	立会	津島	AW03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う危険物保管庫 樹木移植	00.1.17	0.7	造成土内
33	立会	鹿田	CK14, CM12	医 病	病棟新営に伴う仮設電柱	00.1.19	1.1~1.5	近世層まで掘削
34	立会	津島	AW03	環	校舎(Ⅱ期)新営に伴う危険物保管庫 基礎	00.1.24	0.7	造成土内
35	立会	鹿田	CM-CN25-28	医 病	病棟新営に伴う給水管理設	00.1.24	1.5	造成土以下4枚の層確認

番号	種類	調査地区	構内座標	所属	調査名称	調査期間	掘削深度(m)	備考
36	立会	鹿田	CF13, CG13	医 病	病棟新営に伴う工事用出入り口	00.1.25—1.28	0.5—0.9	造成土内
37	立会	津島	AZ14	文法経	総合研究棟建設予定地発掘調査に伴う樹木移植	00.1.25	0.7	造成土内
38	立会	津島	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水樹	00.1.25	0.76—1.3	近世層まで掘削
39	立会	津島	AZ13—14	文法経	津島地区基幹整備	00.1.27	1.3	明治層上面まで
40	立会	鹿田	CFCG13, CL15.16	医 病	病棟新営に伴う仮設ゲート・洗車場	00.1.28	0.47—0.63	造成土内
41	立会	鹿田	CF21—28, CF—CL28, CD—CF28—33	医 病	病棟新営に伴う共同溝解体	00.1.31—2.2	1.7	面積18㎡, 鹿田11事調査3区南側部分で中世ピット確認
42	立会	津島	AZ09	理	コラボレーションセンター新営に伴う排水樹	00.2.9—2.14	1.0—1.2	6箇所。うち1箇所では黒色土対応層まで掘削
43	立会	津島	AZ08	理	コラボレーションセンター新営に伴う樹木移植	00.2.15	0.8	造成土内
44	立会	鹿田	CJ—CL16.17	医 病	病棟新営に伴うカマ場掘削	00.2.16	1	造成土内
45	立会	津島	AV08	工	プレハブ設置に伴う樹木移植	00.2.17	0.6	造成土内
46	立会	鹿田	CN46, CW46, DA46	医 病	病棟新営に伴う汚水樹	00.2.24—3.8	2.3	古墳時代井戸1基, 土坑1基, 中世溝等の遺構確認
47	立会	鹿田	CM・CN・CP・CR・CT58, CV・DA・DC・DD・DF59	医	グラウンド防球ネットポール	00.3.9	2.0—2.3	11箇所。南から6箇所は河道状, 7—10箇所は微高地状, 最北端では河道状
48	立会	鹿田	BT51	医 病	病棟新営に伴う汚水検水樹	00.3.13	2	造成土以下7層確認, 古墳時代層まで掘削か

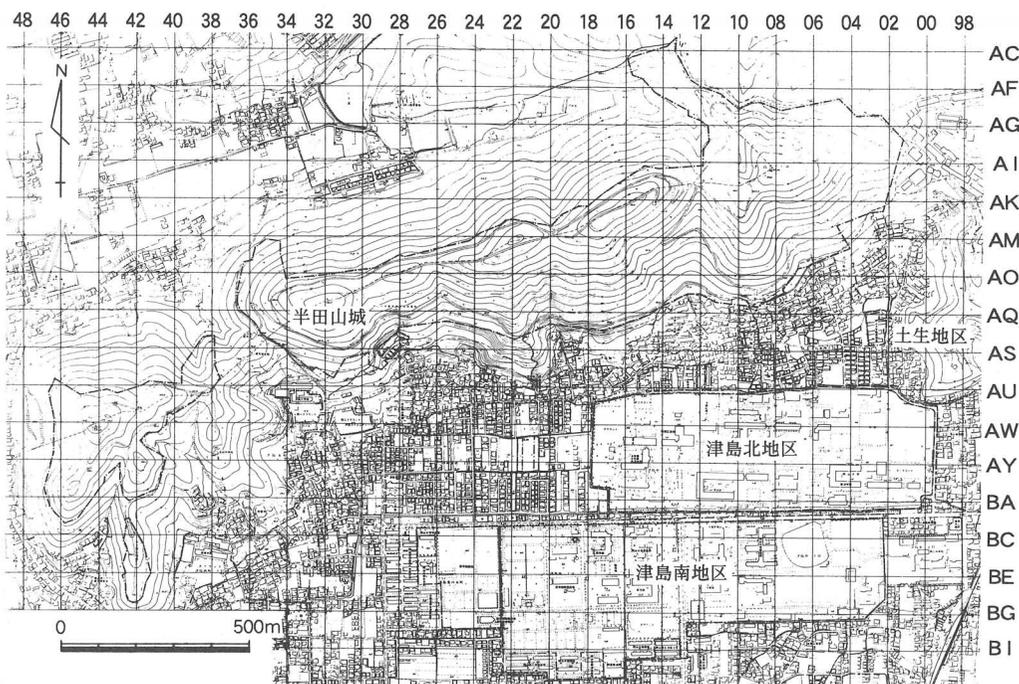


図22 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)



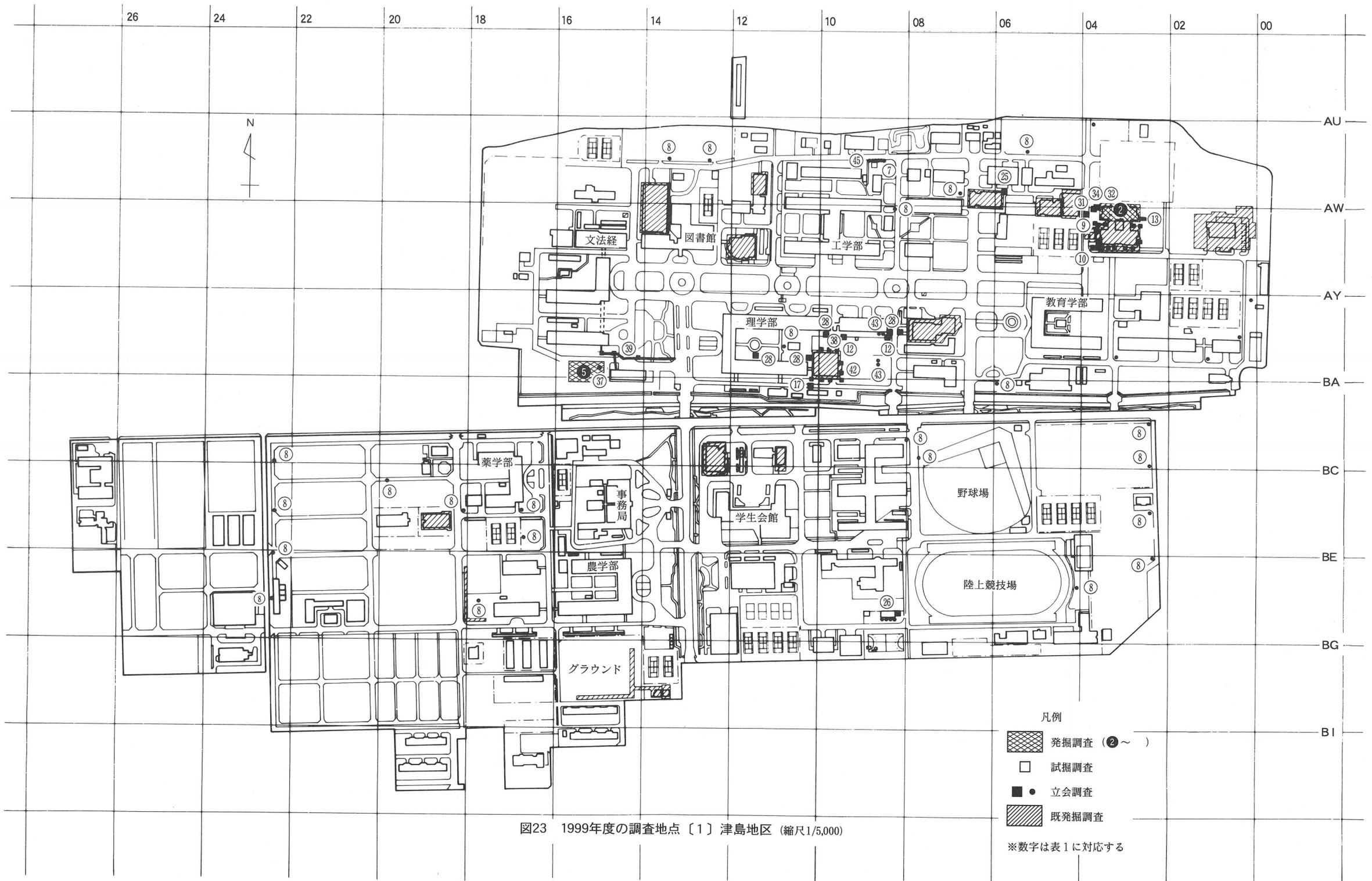
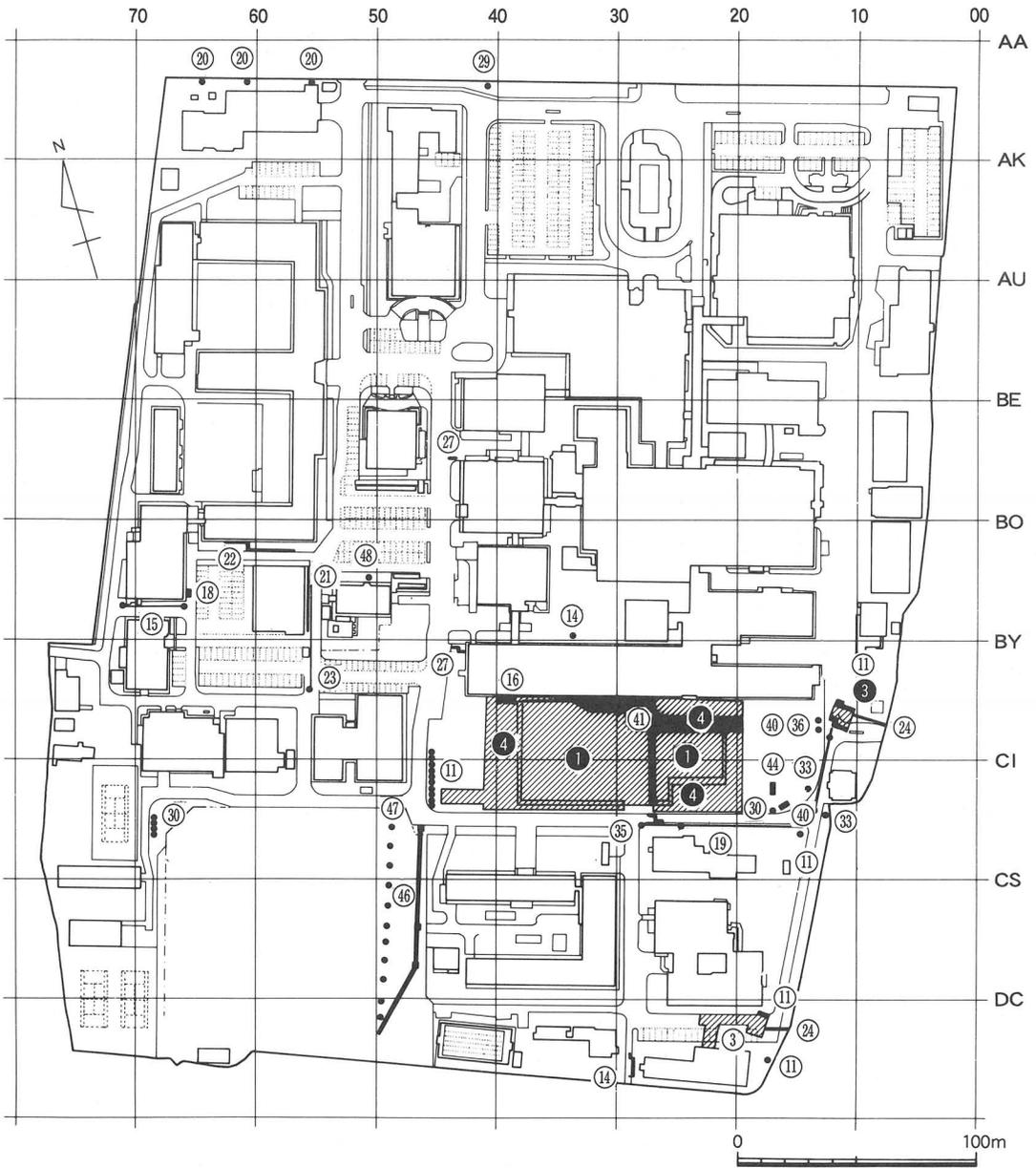


図23 1999年度の調査地点〔1〕津島地区 (縮尺1/5,000)



凡例

-  発掘調査 ( ① ~ )
-  試掘調査
-  立会調査

※数字は表1に対応する

図24 今年度の調査地点〔2〕鹿田地区 (縮尺1/3,000)

## 第2章 1999年度普及・研究・資料整理活動

### 1 資料整理

本年度は次の3件について発掘調査資料の整理を行った。

- ① 津島岡大遺跡第10次調査（保健管理センター）：遺物の実測
- ② 津島岡大遺跡第12次調査（附属図書館）：遺構図整理
- ③ 三朝福呂遺跡（固体地球センター実験研究棟）：報告書刊行

### 2 刊行物

刊行物については、以下の4冊を編集・発行した。

- |                             |         |
|-----------------------------|---------|
| ① 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号   | 1999年9月 |
| ② 岡山大学構内遺跡調査研究年報 第16号       | 2000年1月 |
| ③ 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号   | 2000年3月 |
| ④ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 福呂遺跡 I | 2000年3月 |

### 3 調査員の活動

#### 科研費・研究助成等

##### (1) 校費

山本悦世・岩崎志保・喜田敏・小林青樹・豊島直博・野崎貴博・横田美香：平成11年度教育研究学内特別経費「大学博物館のあり方と学内学術標本のデータベース化に関する学際的研究」

（研究代表者：新納泉）

##### (2) 科学研究費補助金採択状況

小林青樹：平成11年度科学研究費（特定領域研究A2：研究代表者）「縄文・弥生移行期における呪的遺物の集成的研究」

豊島直博：平成11年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代における軍事組織形成過程の研究」

野崎貴博：平成11年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代の土製棺の集成的研究」

#### 資料収集活動

岩崎志保：漢代文物の実見調査，縄文時代後期集落遺跡調査（長崎県福江市中島遺跡）

喜田 敏：弥生時代墳墓出土土器の調査（岡山県古代吉備文化財センター），弥生時代前期墳墓及び出土資料の調査（佐賀県大友遺跡，島根県堀部第1遺跡）

小林青樹：平成11年度科学研究費（特定領域研究A2：研究代表者）「縄文・弥生移行期にお

ける呪的遺物の集成的研究」に関する資料調査

豊島直博：平成11年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代における軍事組織形成過程の研究」に関連する資料収集：古墳出土鉄製品の調査（長崎県，福岡県，鳥取県，島根県，大阪府，京都府の関係諸機関）

野崎貴博：平成11年度科学研究費（奨励研究A）「古墳時代の土製棺の集成的研究」に関する資料調査（島根県，福岡市），福岡県・佐賀県の古墳踏査

山本悦世：縄文時代集落の資料調査（岡山県久田原遺跡），弥生時代前期集落の資料調査（岡山県清水谷遺跡）

横田美香：北房町定北古墳出土陶棺の調査，群集墳の実態調査（兵庫県中町東山古墳群）

#### 学会・研究会参加等

岩崎志保：考古学研究会総会（4月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月）

喜田 敏：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月）

小林青樹：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月），埋蔵文化財研究集会（2月）

豊島直博：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月）

野崎貴博：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），埋蔵文化財研究集会（8月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月）

山本悦世：考古学研究会総会（4月），日本考古学協会総会（5月），関西縄文文化研究会（5月），中・四国縄文研究会（6月），埋蔵文化財研究集会（8月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月），九州縄文研究会（2月）

横田美香：考古学研究会総会（4月），考古学研究会第4回シンポジウム（11月）

#### 研究発表他

野崎貴博：「吉備の集団と地域間交流—埴輪と棺から—」（考古学研究会岡山例会第4回シンポジウム『吉備の埴輪』）

山本悦世：「岡山県下における縄文時代研究の現状と課題」（中・四国縄文研究会）

「鹿田遺跡と鹿田庄」（倉敷埋蔵文化財センター）

#### 論文・資料報告

岩崎志保：「大原美術館所蔵の漢代画像石」『古代吉備』21号

「保管方法の研究—考古資料保管の現状と課題」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編

喜田 敏：「ユニバーサル化計画からみたデジタル・ミュージアムの問題と期待」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編（共著）

小林青樹：『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』考古学資料集第12

「瀬戸内における弥生文化の成立」『シンポジウム記録1 論争吉備』

「ユニバーサル化計画からみたデジタル・ミュージアムの問題と期待」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編（共著）

豊島直博：「古墳時代における軍事組織の形成」『国家形成期の考古学』

「鉄器埋納施設の性格」『考古学研究』第46巻第4号

「ユニバーサル化計画からみたデジタル・ミュージアムの問題と期待」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編（共著）

野崎貴博：「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究』第46巻第1号

「発掘調査担当者資格制度と大学博物館」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編

山本悦世：「資料の保存処理について—考古資料の場合—」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編

横田美香：「岡山県の博物館」『岡山大学自然と人間の共生博物館—新しい大学博物館をめざして—』資料・研究編

その他（博物館の資料展示などに関する実態調査）

岩崎志保：滋賀県立琵琶湖博物館，銅鐸博物館，竹中大工道具館

喜田 敏：山口県立萩美術館・浦上記念館，島根県鹿島町立歴史民俗資料館

山本悦世：竹中大工道具館，川崎医科大学付属現代医学教育博物館

横田美香：大阪府立近つ飛鳥博物館，竹中大工道具館，宮城県立東北歴史博物館，川崎医科大学付属現代医学教育博物館

## 4 日誌抄

1999年

- 4月1日 喜田敏助手, 福井優技術補佐員着任  
 4月2日 第1回月例会議  
 4月15日 第37回運営委員会  
 4月29日 鹿田遺跡第9次調査現地説明会  
 5月7日 鹿田遺跡第10次調査(発進立坑部分)開始  
 5月10日 鹿田9次調査終了, 第2回月例会議  
 5月17日 第38回運営委員会  
 5月20日 鹿田遺跡第10次調査(発進立坑部分)終了  
 県立博物館へ資料貸し出し  
 6月4日 第3回月例会議  
 6月21日 鹿田遺跡第10次調査(到達立坑・現場打ち共同溝部分)開始  
 6月29日 木器処理3期分引き上げ  
 7月1日 第4回月例会議  
 7月6日 鹿田遺跡第10次調査(到達立坑・現場打ち共同溝部分)終了  
 7月8日 県立博物館より遺物返却,  
 7月14日 木器処理第4期分開始(PEG濃度30%より)  
 7月16日 津島岡大遺跡第22次調査, 古環境研究所によるサンプル採取  
 8月2日 第5回月例会議, 文学部博物館実習開始(8月10日まで)  
 8月9日 鹿田遺跡第11次調査造成土掘削開始  
 8月19日 鹿田遺跡第11次調査開始  
 9月2日 第6回月例会議  
 9月6日 鹿田遺跡第10次調査(ヒューム管・高圧マンホール部分)開始  
 9月16日 木器処理PEG濃度30%から40%へ上昇  
 9月17日 センター報22号入稿  
 9月20日 鹿田遺跡第10次調査(ヒューム管・高圧マンホール部分)開始  
 9月21日 運営委員会  
 9月26日 鹿田遺跡第10次調査(PCボックスカルバート部分)開始  
 9月29日 管理委員会

- 10月4日 第7回月例会議, センター報22号納品  
 10月12日 県立美術館写真貸し出し  
 10月14日 鹿田遺跡第10次調査(PCボックスカルバート部分)終了  
 10月18日 注記マシーン搬入  
 10月19日 運営委員会  
 10月25日 津島地区総合研究棟新営予定地試掘調査  
 10月27日 木器処理PEG濃度40%から50%へ上昇  
 11月1日 第8回月例会議  
 12月6日 第9回月例会議  
 12月7日 運営委員会  
 12月21日 鹿田遺跡第11次調査終了  
 12月22日 大掃除, ワックス掛け  
 12月28日 御用納め

2000年

- 1月4日 御用始め  
 1月5日 第10回月例会議  
 1月6日 木器処理PEG濃度50%から60%へ上昇  
 1月25日 建設業作業主任者講習受講(山本・岩崎・豊島・野崎・横田, 1月27日まで)  
 1月27日 津島岡大遺跡第23次調査造成土掘削開始  
 1月28日 構内遺跡調査研究年報16 納品  
 2月1日 第11回月例会議  
 2月3日 津島岡大第23次調査開始  
 2月22日 注記マシーン返却  
 2月23日 工学部電波暗室新営予定地試掘調査  
 3月1日 第12回月例会議  
 3月7日 運営委員会  
 3月14日 構内遺跡発掘調査報告第15冊福呂遺跡I納品  
 3月16日 臨時会議  
 3月29日 年報16, 福呂遺跡I発送  
 3月31日 小林青樹助手・喜田敏助手退職, 豊島直博助手, 奈良国立文化財研究所へ異動

## 5 1999年度までの遺物保管状況

1999年3月31日における本センターの遺物収蔵量は表2に掲げる通で、約30リットル収納のコンテナに換算して2074箱である。昨年度から197箱の減少となった。これは津島岡大遺跡第22次調査、鹿田遺跡第9～11次調査において230箱の遺物の出土があった一方、室内整理において特に土壌サンプルの洗浄・選別作業が進み、結果的に箱数が減じたためである。また試掘・立会調査における遺物の出土は少なく、若干の増加にとどまった。

遺物保管状況については、依然として発掘調査が連続して行われており、箱数は益々増加するのは確実である。遺物整理が進めば、遺物の形態・保存方法は変化することがあり、さらに収蔵スペースが必要となることも予測される。早急の対応が必要である。

表2 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地 調 査 名 称	箱数 (1箱:約30リットル)							備 考 主要時期・特殊遺物	文 献
			総 数	土 器	石器	木器	種子	その他	サンプル		
医病	発掘	鹿田第1次調査(外来診療棟)	598	493	15.5	60	0.5	1	28	弥生中期～中・近世, 短甲状・權状木器等	⑦
"	"	鹿田第2次調査 (NMR-C T室)	118.9	94	0.4	20	0.5		4	弥生後期～中世, 田 舟・木筒等	"
医短	"	鹿田第3次調査(校舎)	131.6	36	0.3	90	0.3		5	古代～中世	⑩
"	"	鹿田第4次調査(配管)	3.5	2	0.3		0.2		1	古代, 鹿角製品	"
医病	"	鹿田第5次調査(管理棟)	130	87	2.5	20	1.5		19	弥生後期～中・近世	⑭
ア	"	鹿田第6次調査 (アイソトープ総合センター)	62	59	0.5	1	1.5			中世, 青銅製腕	⑯
医	"	鹿田第7次調査(基礎医学棟)	81	66		10		1	4	弥生～近世	⑳
"	"	鹿田第8次調査(R I 治療棟)	8	8						弥生～近世	"
医病	"	鹿田第9次調査(病棟)	120.1	96	0.1	13		9	2	弥生～近世, 木筒3点	㉑
"	"	鹿田第10次調査(共同溝)	2	2						古代～近世	"
"	"	鹿田第11次調査(病棟Ⅱ期)	74	66		4		2	2	弥生～近世, 木筒1点	"
全	"	津島岡大第1次調査(NP-1)	5	0.5	0.5	4				弥生中期～古代	③
農	"	津島岡大第2次調査 (農学部合併処理槽・配管)	17.5	12	1.5				4	縄文晩期～弥生前期	④
学生	"	津島岡大第3次調査 (男子学生寮)	67	49	1.5	2	4.5		10	縄文後期～弥生, 古 代～近世 石製指輪, 蛇頭状土器片	⑱
"	"	津島岡大第4次調査 (屋内運動場)	1	1						縄文晩期～弥生前期 〈試掘調査遺物を含む〉	⑥
大自	"	津島岡大第5次調査 (大学院自然科学研究科棟)	82	68	3	1	8		2	縄文後期～弥生, 古 代～近世 耳栓・木製 櫛(縄文)	㉒
工	"	津島岡大第6次調査 (生物応用工学科棟)	49	33	1	9	6			縄文後期～近世 人形 木器, アンペラ	⑳
"	"	津島岡大第7次調査 (情報工学科棟)	31.5	10	0.5	1			20	縄文後期～近世	"

所属	種類	地 調 査 名 区 称	箱数(1箱:約30リットル)							備 考 主要時期・特殊遺物	文 献
			総 数	土 器	石 器	木 器	種 子	そ の 他	サンプル		
全	発掘	津島岡大第8次調査 (遺伝子実験施設)	11.5	10	0.5				1	縄文後期～近世	㉔
工	"	津島岡大第9次調査 (生体機能応用工学科)	50.5	30	2.5	3			15	縄文後期～近世	㉕
全	"	津島岡大第10次調査 (保健管理センター)	84	69		5			10	弥生前期～近世	㉖
"	"	津島岡大第11次調査 (総合情報処理センター)	5.5	3	0.5				2	縄文後期～近世	㉗
"	"	津島岡大第12次調査(図書館)	55	24	1	20			10	縄文後期～近世	㉘
"	"	津島岡大第13次調査 (福利厚生施設 北)	12.5	12	0.5					縄文後期・古墳前期・ 中世	㉙
"	"	津島岡大第14次調査 (福利厚生施設 南)	13	12					1	弥生～古墳	㉚
"	"	津島岡大第15次調査 (サテライトベンチャー・ビジネ スラボラトリー)	67	13	10	20			24	縄文後期・晩期・弥 生～中世 アンペラ	㉛
農業	"	津島岡大第16次調査 (動物実験棟)	0.3	0.3						縄文後期・弥生～中世	㉜
環	"	津島岡大第17次調査 (環境理工学部校舎Ⅰ期)	76	61	3				12	縄文後期～近世	"
全	"	津島岡大第18次調査 (南福利ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	㉝
"	"	津島岡大第19次調査 (コラボレーションセンター)	45	24	1	4		2	14	縄文後期～近世	"
環	"	津島岡大第20次調査 (環境理工学部ポンプ槽)	1	1						縄文後期～近世	"
工	"	津島岡大第21次調査 (工学部エレベーター)	7	5	2					縄文中期～近世	"
環	"	津島岡大第22次調査 (環境理工学部校舎Ⅱ期)	34	26	2	3			3	縄文後期～近世, 古代 堰部材, 曲げ物	"
固	"	福呂遺跡第1次調査 (実験研究棟)	9	8					1	縄文早期・弥生中期・ 中世	㉞
"	"	福呂遺跡第2次調査 (実験研究棟 スロープ)	2.1	2				0.1		中世～近世	"
医病	試掘	鹿 田 駐 車 場	1	1						弥生～中世	㉟
学生	"	津島北 男子学生寮	1	0.7	0.3					縄文後期～弥生前期	"
教育	"	" 研究棟									
大自	"	" 自然科学研究科棟	1	1						縄文後期～弥生前期	㊱
事	"	津 島 外国人宿舎(土生)	1	1						縄文～中世	㊲
理	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3						中・近世	"
教養	"	津島南 "	0.7	0.7						縄文・中世	"
工	"	津島北 校舎	1	1						縄文～近世	㊳
農業	"	津島南 動物・遺伝子実験施設	0.7	0.7						縄文～弥生, 中・近世	"
事	"	津島南 国際交流会館	0.3	0.3						中世	"

所属	種類	地 区 調 査 名 称	箱数(1箱:約30リットル)						備 考 主要時期・特殊遺物	文 献	
			総 数	土 器	石器	木器	種子	その他			サンプル
大自	試掘	津島北 合併処理槽	0.2	0.2						中・近世	⑭
学生	"	津島南 学生合宿所	0.4	0.2				0.2		中世	"
教育	"	津島北 身障者用エレベーター	0.3	0.3						縄文	"
図	"	" 図書館	0.8	0.8						古墳～中世	"
学生	"	津島南 学生合宿所ポンプ槽	0.4	0.4						縄文～中世	⑮
資生	"	倉 敷 資源生物科学研究所	0.1	0.1						近世	"
ア	"	鹿 田 アイソトープ総合センター	1	1						中世～近世	"
事	"	津島北 福利厚生施設	0.5	0.5						弥生?～中世	"
農	"	津島南 動物実験施設	0.1	0.1						縄文?～近世	⑳
環	"	津島北 環境理工Ⅱ期	0.1	0.1							
工	"	津島北 システム工学科棟	0.1	0.1							
全	立会	'83年度	2	2						分銅形土製品	①
"	"	'84年度	1	1							②
"	"	'85年度	1	1							⑤
"	"	'86年度	0.5	0.5							⑥
"	"	'87年度	0.5	0.5							⑧
	分布	'89年度 三朝・本島	0.3	0.3							⑭
全	立会	'91年度 '92年度	0.3	0.3							㉑ ㉒
"	"	'93年度 '94年度 '95年度 '96年度 '97年度 '98年度 '99年度	0.8	0.8							㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗
総 箱 数			2073.9	1500.7	50.9	290	23	15.1	194.2		

\*木器・種子・サンプルについては、資料整理が進むにつれ、特に収容形態が変化するため、箱数の変化が顕著であることを断っておく。

## 6 遺物の保存処理

本センターでは1992年度より構内遺跡から出土した木製品について PEG（ポリエチレングリコール）含浸による保存処理作業を行っている。これまで、第1期保存処理を1992年7月～1993年11月、第2期保存処理を1994年6月～1996年8月まで実施してきた。

今年度は昨年度より継続中の第3期分について最終的な作業を行い、さらに第4期分処理を開始した。

### (1) 第3期保存処理

第3期保存処理は1996年12月から開始したもので、処理工程は表3の通りである。

第3期分保存処理は年度としては4年にわたり、これまでより長期の処理となった。これ

は、この間、発掘調査が相次ぎ、調査の間を縫っての作業となったことと、処理回数を重ねてきたことから濃度上昇を10%刻みとして含浸期間を長くとることが有効であるとわかってきたことの2点の理由からである。濃度が90%に達して以後は5%の上昇とし、95%としてからは、処理槽の蓋を開け、水分を蒸発させることで100%に近づけ、今年度の6月に全工程を終了した。

#### (2) 第4期保存処理

第4期保存処理は7月15日より開始した。開始時のPEG処理濃度は30%である。以後今年度の処理工程は以下の通りで、引き続き来年度に継続した。

1999年7月15日	処理開始(30%より)	2000年1月6日	濃度60%に上昇
9月16日	濃度40%に上昇	3月16日	濃度70%に上昇
10月27日	濃度50%に上昇		

## 7 利活用状況

### a. 資料等の貸し出し

月 日	資 料	貸し出し先	用 途
5月7日	鹿田遺跡写真	中世都市研究会事務局	「中世都市研究第6号—都市研究の方法」掲載のため
5月20日	鹿田遺跡出土木製短甲	岡山県立博物館	特別展「岡山の甲冑」展示のため
9月3日	津島岡大遺跡貯蔵穴カラー写真・同遺跡出土東日本系土器写真	雄山閣出版社	季刊考古学第69号掲載のため
10月5日	津島岡大遺跡出土櫛の写真	岡山県立美術館	第46回日本伝統工芸展岡山店関連事業「子供鑑賞ガイド」掲載のため
10月15日	鹿田遺跡井戸・土坑出土ガラス滓	岡山理科大学自然科学研究所	蛍光X線分析のため
1月6日	鹿田遺跡発掘調査写真(リバーサルフィルム)	岡山市教育委員会	岡山市埋蔵文化財センター展示

表3 第3期木器処理工程

1996年12月18日	処理開始(濃度16.5%)
1997年3月21日	濃度25%へ
年6月10日	濃度40%へ
年9月9日	濃度50%へ
1998年1月20日	濃度60%へ
年6月2日	濃度70%へ
年9月7日	濃度80%へ
年10月21日	濃度90%へ
1999年2月17日	濃度95%へ
年3月26日	処理層の蓋開け
年6月29日	第3期分処理終了

b. センター展示・発掘調査見学状況

① 鹿田遺跡第9次調査見学

5月6日 鹿田小学校6年生144名

4月29日 現地説明会200名

② 津島岡大遺跡第22次調査見学

4月28日 横井小学校6年生140名

6月3日 岡山大学文学部地理学学生35名

6月8日 岡山大学理学部地学教室

7月8日 岡山大学文学部考古学入門学生

7月13日 岡山大学教育学部地理学学生10名

③ センター展示見学

7月15日 岡山大学文学部考古学入門学生17名ほか、1999年度合計 約40名



写真3 鹿田9次調査 現地説明会開催状況

## 第3章 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

### 第1節 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

#### 1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

##### (設置)

第1条 岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）を置く。

##### (目的)

第2条 センターは、本学の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

##### (自己評価)

第2条の2 センターは、岡山大学学則（昭和26年岡山大学規程第32号）第1条の2の定めるところにより、センターの係る点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行うものとする。

- 2 前項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「自己評価委員会」という。）を置く。
- 3 自己評価委員会に関する規程は、別に定める。

##### 附 則

この規程は、平成5年2月25日から施行する。

○岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価を行うこととするため。

##### (センター長)

第3条 センターにはセンター長を置く。

- 2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。
- 3 センター長は、センターに関する業務を掌理する。
- 4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

##### (調査研究室)

第4条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

- 2 調査研究室に室長、調査研究員及びその必要な職員を置く。
- 3 室長は、専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。
- 4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。
- 5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

##### (調査研究専門委員)

第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

- 2 専門委員は、本学の教官の内から学長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理委員会)

第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

2 管理委員会に関する規程は、別に定める。

(運営委員会)

第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する規程は、別に定める。

(事務)

第8条 センターの事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

2 この規程施行後最初に任命されるセンター長、室長及び専門委員の任期は、第3条第4項、第4条第5項及び第5条第3項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図るため、学内施設として、新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

## 2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第6条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 管理委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

(組 織)

第3条 管理委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 学長
- 二 各学部及び教養部長
- 三 自然科学研究科長
- 四 資源生物研究所長
- 五 附属図書館長
- 六 各附属病院長
- 七 地球内部研究センター長
- 八 学生部長

- 九 医療技術短期大学部主事
- 十 事務局長
- 十一 埋蔵文化財調査研究センター長

(委員長)

第4条 管理委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

- 2 委員長は、管理委員会を召集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

(幹事)

第6条 管理委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(庶務)

第7条 管理委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

附 則

この規程は、昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し、必要な事項を定めるため。

### 3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規定第48号）第7条第2項に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する具体的な事項を審議する。

(組 織)

第3条 運営委員会は、次の号に掲げる委員で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 本学の教授のうちから学長が命じた者若干名
- 三 センターの調査研究専門委員から学長が命じた者1人
- 四 センターの調査研究室長
- 五 施設部長

2 前項第2号の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を召集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

## 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

### (庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

### 附則

- 1 この規程は、昭和62年11月26日から施行する。
- 2 この規程施行後最初に任命される第3条第1項第2号の委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、昭和64年3月31日までとする。

### ○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し、必要な事項を定めるため。

## 4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程

### (趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の第3項の規定に基づき、岡山埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

### (審議事項)

第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施に関し、必要な事項を審議する。

### (組織)

第3条 委員会は次の各号に掲げる者で組織する。

- 一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）
- 二 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長
- 三 センターに勤務する教官のうちから若干名
- 四 埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員のうちからセンター長が委嘱した者若干名
- 五 施設部長

2 前項に定める委員のほか、センター長が必要と認めた者を加えることができる。

### (委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

### (会議)

第5条 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

### (庶務)

第6条 委員会の庶務は、施設部企画課において処理する。

### (雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、別に定める。

### 附則

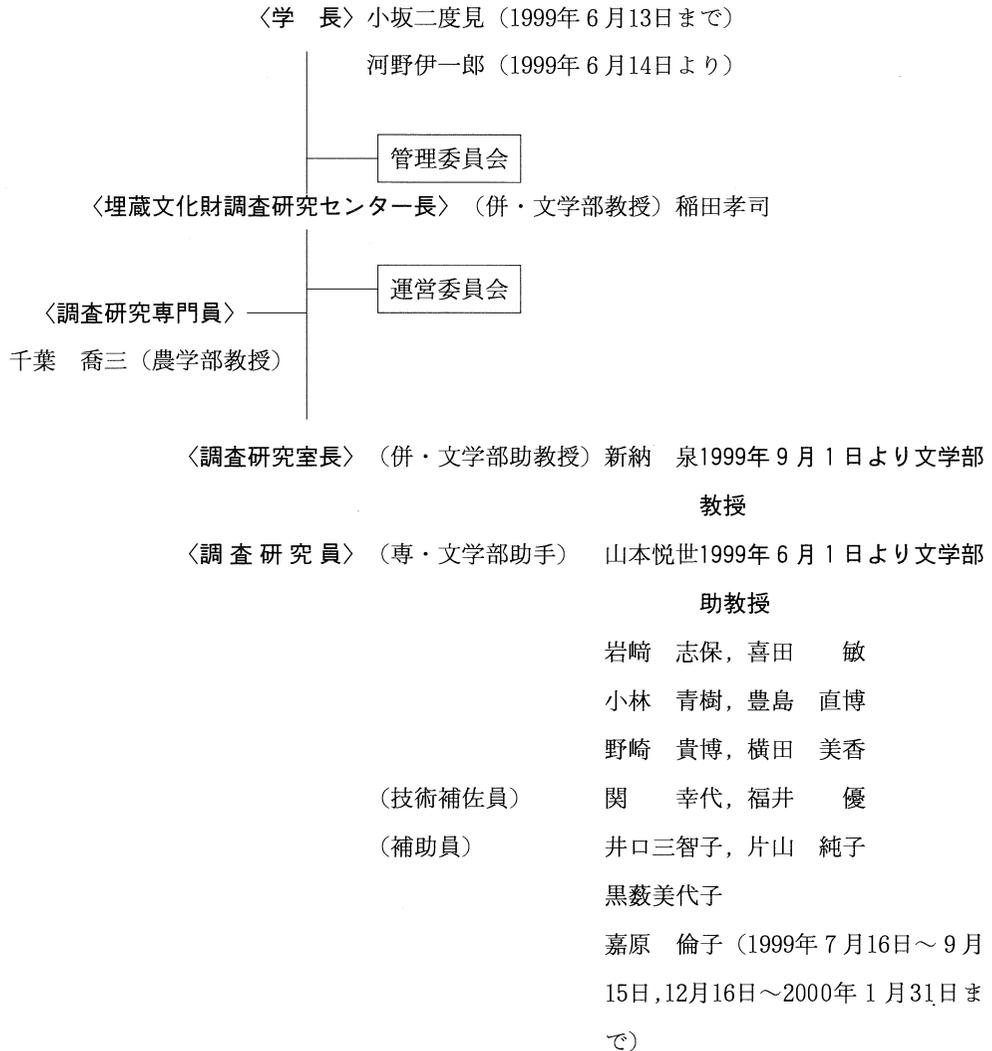
この規程は、平成5年2月25日から施行する。

### ○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの研究活動等についての点検及び評価の実施に関する必要な事項を審議するために置く岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会について、必要な事項を定めるため。

## 第2節 1999年度埋蔵文化財調査研究センター組織

### 1 センター組織一覧



### 2 管理委員会

#### 委員

学 長	小坂二度見 (1999年6月13日まで)	法学部長	石島 弘
	河野伊一郎 (1999年6月14日から)	経済学部長	建部 和弘
副学長	松畑 熙一 (1999年6月13日まで)	理学部長	山崎比登志
	佐藤 公行 (1999年6月14日から)	医学部長	難波 正義
文学部長	稲田 孝司	歯学部長	松村 智弘
教育学部長	森川 直	薬学部長	原山 尚

## 岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

工学部長	大崎 紘一	医学部附属病院長	荒田 次郎
環境理工学部長	阪田 憲次	歯学部附属病院長	佐藤 隆志
農学部長	稲葉 昭次	固体地球研究センター長	河野 長
文化科学研究科長	工藤進思郎	医療技術短期大学部長	太田 武夫
自然科学研究科長	中島 利勝	事務局長	諸橋 輝雄
資源生物化学研究科長	本吉 總男	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司
附属図書館長	岩見 基弘		

### 幹 事

事務局総務部長	山崎 洋輔	事務局施設部長	遠藤 久男
事務局経理部長	菊地 俊彦		

### 審議事項

- 1999年4月28日 平成10年度決算及び平成11年度予算案について  
平成11年度事業計画  
鹿田遺跡第9次調査経過報告
- 1999年9月29日 岡山大学津島地区内遺跡保護について  
医学部附属病院病棟新営に伴う事業計画の変更について
- ・鹿田遺跡第9次調査の終了, ・津島岡大遺跡第22次調査の終了
  - ・鹿田遺跡第11次調査について, ・鹿田遺跡第10次調査について
- 1999年10月27日 助手の任期制について
- 1999年12月22日 助手の採用について  
平成13年度概算要求事項について  
埋蔵文化財調査研究センターの人事について  
岡山大学総合研究博物館(仮称)構想について  
平成11年度補正予算に伴う事業計画について
- ・鹿田遺跡第10次調査の終了, ・鹿田遺跡第11次調査の終了報告
  - ・津島岡大遺跡第23次調査について
- 2000年3月22日 助手の採用について

## 3 運営委員会

### 委 員

センター長	稲田 孝司	文学部教授	倉知 克直
理学部教授	柴田 次男	農学部教授	千葉 喬三(調査研究専門員)

医学部教授 村上 宅郎 事務局 遠藤 久男(施設部長)  
環境理工学部教授 名合 宏之 埋蔵文化財調査研究センター 新納 泉(調査研究室長)

#### 審議事項

- 1999年 4月15日 平成10年度決算及び平成11年度予算案について  
平成11年度事業計画
- 1999年 5月17日 定員の振替について  
岡山大学津島地区東北隅地域の遺跡保護について  
借用定員の今後の在り方について  
その他
- 1999年 9月21日 助手の任期制について  
医学部附属病院病棟新営に伴う事業計画の変更について  
・鹿田遺跡第9次調査の終了，・津島岡大遺跡第22次調査の終了  
・鹿田遺跡第11次調査について，・鹿田遺跡第10次調査について
- 1999年10月19日 助手の任期制について
- 1999年12月 7日 助手の採用について  
平成13年度概算要求事項について  
鹿田遺跡第11次調査経過報告  
施設整備に伴う今後の埋文調査予定について  
作業主任者講習の受講について
- 2000年 3月 7日 助手の採用について  
埋蔵文化財調査研究センター人事について  
埋蔵文化財調査研究センター規程等の改正について

### 第3節 1999年度審議・決定事項

1999年度には、埋蔵文化財調査研究センターに関わる規則等の改正をはじめとして、いくつかの重要な事項が審議・決定された。以下に審議過程および決定事項について掲載する。

#### 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則等の改正

2000年3月7日開催の運営委員会において、埋蔵文化財調査研究センター規則、埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規則、埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規則の一部改正が報告され、2000年4月1日より施行されることとなった。

改正点は以下の通りである。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程の一部改正新旧条文対照表

現 行	改 正
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則
第1条・第2条 省略 (自己評価)	第1条・第2条 同左 (自己評価等)
第2条の2 センターは、岡山大学学則(平成6年岡山大学規程第64号)第2条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価(以下「自己評価」という。)を行うものとする。	第2条の2 センターは、岡山大学学則(平成6年岡山大学規程第64号)第2条の定めるところにより、センターに係る点検及び評価(以下「自己評価」という。)を行い、その結果を公表する。
	2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けるよう努めるものとする。
2 前項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会(以下「自己評価委員会」という。)を置く。	3 第1項の自己評価を行うため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会(以下「自己評価委員会」という。)を置く。
3 自己評価委員会に関する規程は、別に定める。	4 自己評価委員会に関し、必要な事項は、別に定める。 (教育研究等の状況の公表)
	第2条の3 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。
第3条 センターにセンター長を置く。	第3条 センターにセンター長を置く。
2 センター長は、専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が命ずる。	2 センター長は、専門的知識を有する本学の専任教授のうちから学長が命ずる。
3・4 省略 (調査研究室)	3・4 同左 (調査研究室)
第4条 1・2 省略	第4条 1・2 同左
3 室長は、専門的知識を有する本学の教官のうちから学長が命ずる。	3 室長は、専門的知識を有する本学の専任教官のうちから学長が命ずる。
4～6 省略 (調査研究専門委員)	4～6 同左 (調査研究専門委員)
第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。	第5条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。
2 専門委員は、本学の教官のうちから学長	2 専門委員は、本学の専任教官のうちから学長

現 行	改 正
<p>が命ずる。</p> <p>3 省 略 (管理委員会)</p> <p>第6条 本学に、センターの管理運営の基本方針等を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。</p> <p>2 管理委員会に関する規程は、別に定める。 (運営委員会)</p> <p>第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。</p> <p>2 運営委員会に関する規程は、別に定める。</p> <p>第8条 省 略</p> <p>第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。</p>	<p>が命ずる。</p> <p>3 同 左 (管理運営の基本方針等)</p> <p>第6条 センターの管理運営の基本方針等は、岡山大学部局長会で審議する。</p> <p>第7条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。</p> <p>2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。</p> <p>第8条 同 左</p> <p>第9条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p style="text-align: center;">この規程は、平成12年4月1日から施行する。</p>

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程の一部改正新旧条文対照表

現 行	改 正
<p>(趣旨)</p> <p>第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。</p> <p>第2条～第6条 省 略</p>	<p>(趣旨)</p> <p>第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規則（昭和62年岡山大学規程第48号）第7条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。</p> <p>第2条～第6条 同 左</p> <p style="text-align: center;">附 則</p> <p style="text-align: center;">この規程は、平成12年4月1日から施行する。</p>

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会規程の一部改正新旧条文対照表

現 行	改 正
<p>(趣旨)</p> <p>第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター<u>規程</u>（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第3項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。</p> <p>(審議事項)</p> <p>第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施に関し、必要な事項を審議する。</p> <p>第3条～第7条 省 略</p>	<p>(趣旨)</p> <p>第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター<u>規則</u>（昭和62年岡山大学規程第48号）第2条の2第3項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。</p> <p>(審議事項)</p> <p>第2条 委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）に係る点検及び評価の実施<u>並びにその結果の公表</u>に関し、必要な事項を審議する。</p> <p>第3条～第7条 同 左</p> <p style="text-align: center;"><u>附 則</u></p> <p><u>この規程は、平成12年4月1日から施行する。</u></p>

## 2. 岡山大学津島地区東北隅地域の遺跡保護について

津島地区東北隅地域に遺跡保護区を設けることが1999年5月17日開催の運営委員会および、9月29日開催の管理委員会で決定され、12月22日の施設設定委員会において施設長期計画配置図に同保護区の範囲（約17,000㎡）を明示することが了承された。

### 岡山大学津島地区東北隅地域の遺跡保護について

平成11年9月29日 第29回埋蔵文化財調査研究センター管理委員会

#### 1. 津島地区東北隅地区の遺跡の内容と特色

(1) 各時代の遺構が重複 岡山大学津島地区東北隅の馬場を中心とした地域は、工学部校舎、環境理工学部校舎、大学院自然科学研究科棟、サテライトベンチャービジネスラボラトリー棟の建設に伴う発掘調査および平成10年度に行った試掘調査等により、縄文時代の集落関係遺構、弥生時代から古代・近世に至るまでの水田遺構等が特に良好な状態で重複し埋没していることが判明している。

(2) 農耕開始の歴史を解明 この地域のすぐ北には縄文時代の貝塚として著名な朝寝鼻貝塚があり、本学東北隅地域の遺跡はこれと密接に関連している可能性が高い。とりわけ縄文時代後期（約4000年前）から弥生時代早・前期（紀元前500—300年）の遺構・遺物は、日本における農耕の起源と発展の歴史をたどるうえで重要である。

#### 2. 遺跡保護の方法

津島地区東北隅地域の遺跡は、多くの時代の遺構が重複し、各時代とも遺構の密度が濃く、発掘調査には多大の経費と期間を要する。また仮に建設工事のために発掘調査を行った場合でも、国や県・市の指定史跡となるような重要遺構が発見されて建設工事が不可能となるような事態も予想されないではない。したがって東北隅地域の特に重要と思われる範囲については、今後、地下遺構の損壊に至るような施設の計画を行わないよう学内関係部局・関係委員会等の協力が要請される。また、津島長期計画書の計画施設配置図修正版には、遺跡保護区を明示することが望まれる。

遺跡保護区においては、馬場など現存施設を現状のまま使用することはさしつかえないが、将来においては遺跡公園として整備し、学内での研究・教育や地域の生涯学習の場として活用することが望ましい。

#### 3. 津島地区東北隅地域における遺跡保護区の範囲

津島地区東北隅地域における遺跡保護区は、別紙の図の通りとする。（約17,000㎡）。

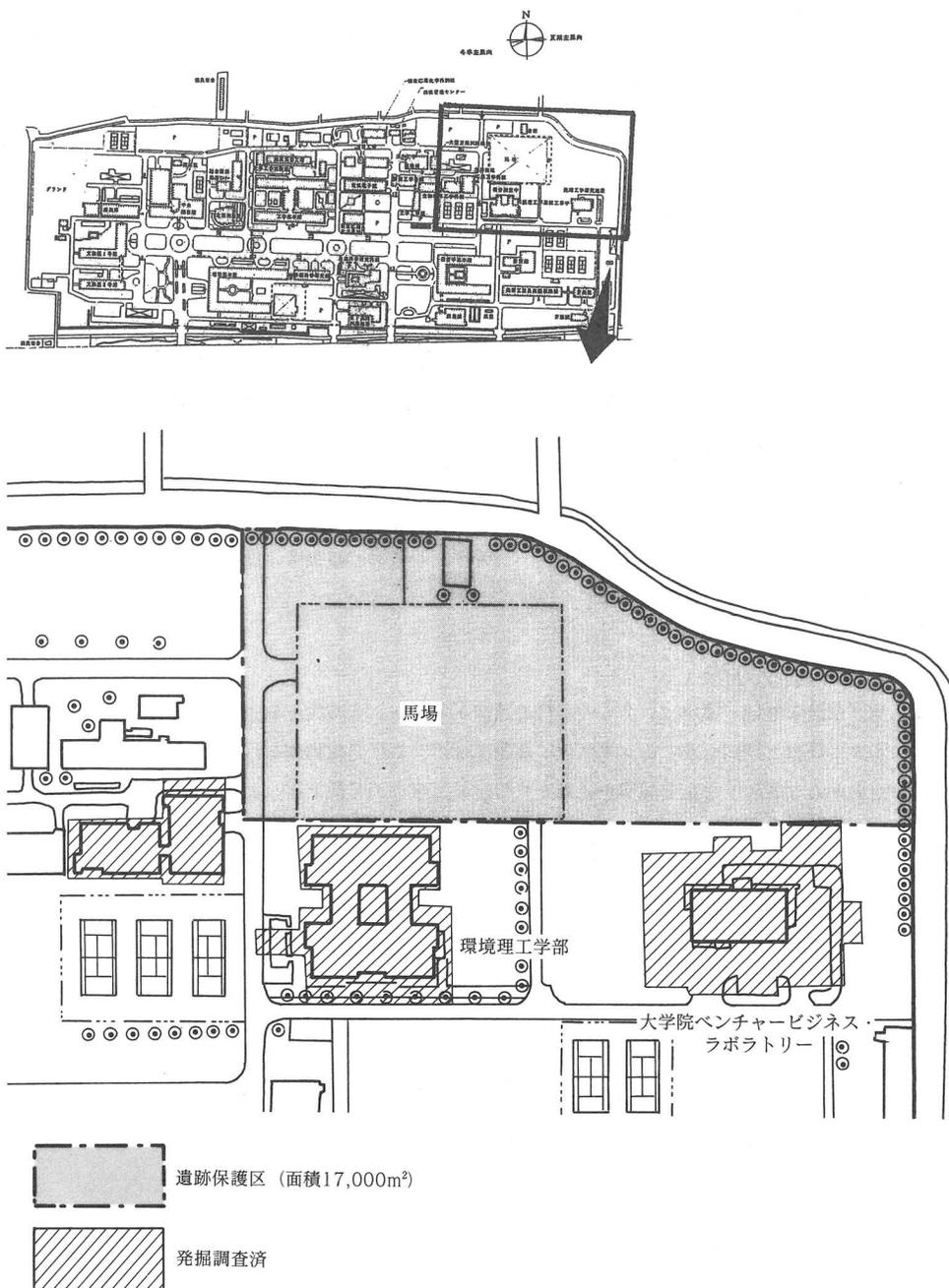


図25 津島地区東北隅地域における遺跡保護区の範囲

### 3. 岡山大学学内共同利用施設における助手の任期に関する規程（H11.3.25岡山大学規程第3号）

1999年9月21日・10月19日に開催された運営委員会での協議，10月27日開催の管理委員会での審議を経て，11月24日開催の評議会において決定され，以後採用予定の助手については任期3年，再任可（原則として1回）という条件で任期制が付されることになった。

#### 岡山大学学内共同利用施設における助手の任期に関する規程

〔平成11年3月25日〕  
岡山大学規程第3号

（目的）

第1条 大学の教員等の任期に関する法律（平成9年法律第82号。以下「法」という。）第3条第1項の規定に基づき，岡山大学学内共同利用施設における助手の任期に関する規程を定める。

（学内共同利用施設の定義）

第2条 この規程において「学内共同利用施設」とは，各学内共同教育研究施設並びに保健管理センター，R I 共同利用津島施設，環境管理センター及び埋蔵文化財調査研究センターをいう。

（教育研究組織等）

第3条 任期を定めて任用する助手は，別表に定めるとおりとする。

（同意）

第4条 任用に際しては，文書により，任用される者の同意を得なければならない。

（周知）

第5条 この規程を定め，又は改正したときは，岡山大学学報等により，広く周知を図るものとする。

（細目）

第6条 この規程に定めるもののほか，この規程の実施に関し必要な事項は，評議会の議を経て，学長が別に定める。

附 則

この規程は，平成11年4月1日から施行し，同日以降に任用される者について適用する。

附 則

この規程は，平成11年11月25日から施行し，改正後の別表中埋蔵文化財調査研究センターの項に係る部分は，同日以降に任用される者について適用する。

別表 法第4条第1項第2号の規定に基づき任期を定めて任用する助手（第3条関係）

教 育 研 究 組 織	任期	再任に関する事項
総合情報処理センター・研究開発室セキュリティ技術部門	5年	再任不可
遺伝子実験施設・遺伝子応用学部門	5年	再任不可
埋蔵文化財調査研究センター	3年	再任可（原則として1回）

#### 4. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

1999年度に埋蔵文化財調査研究センター内で検討してきたものを、2000年4月6日開催の運営委員会で協議し、5月15日付で下記の通り制定された。

#### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日  
埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部長

##### I 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

##### II 発掘現場で注意すべき事項

###### 1 服装・装備・用具等

- 1) 安全で機能的な服装にする。
- 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
- 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
- 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
- 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。

###### 2 掘削

###### 1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本的には75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。

###### 2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。

###### 3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。

3 高所（高さ2 m以上の場所）での作業

- 1) 作業中には安全帯を使用する。
- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
- 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。

4 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

- 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
- 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
- 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
- 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
- 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

- 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
- 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
- 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。

5 健康管理

- 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

Ⅲ その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

以 上

## 第4章 1999年度業務のまとめ

1999年度は、当初センター長以下、助手7名、技術補佐員2名の体制でスタートした。6月1日付けで助手1名が助教授に昇進となり、センター設立以来の要求事項であった専任ポストが承認されたという、体制上での大きな変化があった。

今年度の発掘調査も、昨年度同様、ほぼ切れ目なく実施された。まず津島地区においては継続事業である第22次調査と、第23次調査の2件を実施した。22次調査では、期待された縄文時代後期の微高地上の集落域にはあたらなかったが、微高地から河道にかけての状況について有益な情報が得られた。第23次調査は津島北地区の南西部において初のまとまった面積の調査である。近世～中世の耕作関連遺構等が検出され、2000年度に継続されている。

鹿田地区では、昨年度からの継続事業である第9次調査を5月まで実施し、その後も鹿田キャンパスの南東部において、共同溝敷設に伴う第10次調査及び病棟Ⅰ期工事追加分となる第11次調査を実施した。11次調査は病棟建築計画の変更に伴って9次調査を外側に拡大した部分に対して実施したものであり、両調査地点の合計面積は4600㎡となった。この両調査では、特に弥生時代後期頃の水田遺構を検出したことが注目される。これまで判明していた集落域と併せて、生産域がその南に広がることが確認され、鹿田遺跡における土地利用に対する重要な情報が得られた。また中世段階においても、東西・南北それぞれの溝を区画とする集落の在り方が明らかとなってきており、今後出土遺物等の分析も含めて総合的な検討が期待される。

試掘調査は2件を実施した。1件は前述の津島岡大遺跡第23次調査に伴うものであり、もう1件は工学部内の小規模な仮設建物建設に伴うものである。後者においては津島北地区に保存されている山塊周辺の地形についての知見が得られた。

立会調査は津島・鹿田地区あわせて、42件の事業について実施した。若干の連絡不行き届き等もあったが、全体として迅速な対応が図られ、構内各地で有益な知見が得られた。

室内の整理作業の成果としては『福呂遺跡Ⅰ』の報告書の刊行がある。三朝地区の固体地球センター実験研究棟の発掘調査成果をまとめたものである。定期刊行物として構内遺跡調査研究年報16、センター報22・23号を刊行した。その他遺物の基礎整理作業及び2件の調査に対して報告書刊行に向けた資料整理を実施した。木器保存処理については第3期分を終了し、第4期分を開始した。

今年度は発掘調査5件（うち1件は次年度に継続）、試掘調査2件、立会調査42件の実施、1冊の報告書の刊行と、充実した業務内容であったと言えよう。今後も学内外を問わず調査成果の公開・普及・啓蒙活動を積極的に行い、埋蔵文化財に対する更なる理解を得たい。（岩崎）